

## プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(4)

奥 谷 浩 一

---

### 要 旨

前稿では植物の位置形式にかんするプレスナーの理論を検討したが、本稿では動物の位置形式にかんする理論が検討の対象となる。プレスナーによれば、植物が周囲の環境にたいしておのれを委ね、したがって開放的な位置性をとるのにたいして、動物は周囲の環境にたいしておのれを遮断して行動し、したがって閉鎖的な位置性をとる。閉鎖的な位置性は、動物が組織的に分化した身体諸器官とこれを統合する中枢神経系をもつことを促すとともに、周辺領野にたいして自立的におのれの足で立つことを要求する。この段階にいたって動物的な有機組織は、正対性にもとづき、また知覚と反応の行動図式を形成することによって、周辺領野に相対することになる。しかし動物は、彼らが空間的には〈ここ〉、時間的には〈今〉のうちに組み込まれて、これから身を引き離したり、空間・時間と事物とを客観的に対象化することができず、ここに動物の達成限界がある、とプレスナーは言う。しかし、プレスナーのこうした叙述は、生物学出身の彼の経歴にふさわしく、当時の生物学の諸成果に依拠してはいるが、問題が位置性または位置形式に還元されるあまり、全体として見れば、動物と人間との質的区別という、シェーラーに始まる哲学的人間学に共通の思考の枠組みを超え出ることができなかったといわなければならない。プレスナーがいう、時間・空間のうちへの埋没を初めとする動物のさまざまな達成限界と、これを超えた人間の脱中心的な位置性との差異も、動物と人間の位置形式の根本的な差異というよりは、動物の意識活動の制約と、急速な大脳化にともなう人間の意識活動の飛躍的前進との差異であると考えてはならない理由は存在しないであろう。

キーワード：閉鎖的位置形式、中心性、外中心化、正対性、歴史的反応基盤

### 目 次

第一章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(1)	(第66号掲載)
第二章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(2)	(第68号掲載)
第三章 生命性の現存在様式と位置性	(第70号掲載)
第四章 開放的形式をもつ生命としての植物の位置性	(同 上)
第五章 動物の領域における閉鎖的な位置形式	(以下、本号掲載)
(1) 位置形式から見た植物と動物の比較	
(2) 中心性と正対性	
(3) 動物の限界と〈ここー今〉への埋没	
(4) 正対性のふたつの可能性または方向性	
(5) 本能・知能・意識	
(6) 記憶と歴史的な反応基盤	
(7) 動物の位置性にかんするプレスナーの理論の評価のために	

## 第五章 動物の領域における閉鎖的な位置形式

### (1) 位置形式から見た植物と動物の比較

前章においてすでに検討したように、プレスナーによれば、植物と動物との基本的な相違は、ただたんに経験科学的に確認される次のような諸特徴だけにあるのではない。それは、植物が光と炭酸ガスと水分から炭水化物を合成して酸素を放出するという、いわば自給自足を基本としながら、発達した中枢神経系と高度な知覚・運動系をもたず、それゆえに諸器官が植物有機体全体にたいして高度な自立性を保っているのに対して、動物は、植物とは反対に、肉体内部で自ら栄養を合成する能力を欠如するがゆえに、有機体自身とそれの諸器官とを感覚・運動的に連結する中枢神経系の発達を促進し、この高度な感覚・運動系によって栄養摂取を行うという周知の諸特徴である。そうではなくて、プレスナーが着目するのは、それぞれの有機体が栄養環境を含む周辺領野にたいしてどのような位置的關係をもつかという問題であり、しかもこの問題を、経験と経験科学によらずに、むしろ経験を越えたところで、それぞれの有機体の活動の可能性を制約する条件として明らかにし、そうすることによってこれをさらに人間の位置形式と対比しながら人間存在の独自性を解明することが、プレスナーの哲学的人間学の課題となる。人間を含むそれぞれの有機体がおのれの生活環境または周辺領野にたいしてとる位置的形式の独自性とそれらのあいだの差異は、プレスナーによれば、生物の活動の「可能性を制約する条件」であるという意味において、ア・プリオリに析出される形式的諸關係にほかならないとされる。

植物においては、有機体とこれを取り巻く固有の環境、プレスナー特有の用語で言えば、周辺領野との位置的關係という観点から考察するならば、この有機体は、そのあらゆる生命発現において無媒介に周囲環境へと組み込まれ、この有機体がぞくする生命圏の従属的な部分となっている。つまり植物は、例えばその受粉や種子の散布のさいに自らが決して選択主体ではなく、風や昆虫や鳥などの他者によって媒介されるように、環境との関わりにおいては没主体的であり、周囲の環境とおのれを取り巻く生命圏にたいしては受動的・従属的であり、周辺領野とおのれの生命圏のうちに、言い換えれば自らの生命活動の媒体のうちに、直接的または無媒介に組み込まれている。こうした関係では、むしろ環境の方が自立的であり、植物に対してはいわば主体としてふるまう。つまり植物は、おのれの外部の周辺領野にたいしては直接におのれを委ね、おのれをおのれの生活圏へと開放するという意味において、「開放的な」位置形式をとる。

これにたいして動物は、植物とは反対に、栄養を自己内で合成しえず、これを自己外の有機物の摂取に求めることを強制されるからこそ、肉体諸器官とこれらを中心的に統合する中枢神経系を自己内に発達させて感覚・運動能力を高め、そうして環境から自己の肉体とその諸器官を閉鎖的に遮断するとともに、自らの知覚器官によって外界からの特定の刺激を受け取るとた

だちに実行器官をもってこれに反応し、外界へと反作用するという行動図式を発達させて、環境にたいして敏速に行動せざるをえない。したがって動物は、環境または外部の自然との関わりという観点から見れば、環境にたいしては自立的であり、周辺領野と生命圏、つまり自らの生命活動の媒体へと、間接的にまたは媒介的に組み込まれている。動物は環境に対してはある程度までは選択的にふるまうことができるという意味では、動物自身が選択的な行動主体であり、むしろ環境の方が動物にとっては従属的であって、環境が彼らにたいして開放されている。それゆえにプレスナーはこう述べている。「有機体を、そのすべての生命発現のなかで、媒介的にその環境へと組み込み、有機体を、それに対応する生命圏の自立的な部分とするような形式は、閉鎖的である。有機体の環境と境界を接するすべての有機体の諸平面とともに有機体を機能の担い手とさせることが開放的な形式にぞくするとすれば、閉鎖的な形式とは、環境に対して生物ができるかぎり強くおのれの生活圏に閉じこもるというかたちで、自己を発現しなければならないであろう」<sup>(1)</sup>、と。

動物が、植物とは異なって、彼らを取り巻く生命圏の自立的な部分となっているということは、真の自立性という新しい現実存在の基盤をこの生物に与えることになる。しかし、このことは同時に、動物が真の自立性のゆえに、いわばその引き換え条件として、被置性 *die Gestelltheit*、すなわち環境と周辺領野のただなかに自分自身の足だけで立たせられており、おのれの行動をおのれの責任において引き受けるということを意味せざるをえない。プレスナー自身の言葉で言えば、「この有機体は真の自立性、すなわち、自分の足で立たせられているという在り方 *Gestelltheit* を与えられてもいる。そしてこれはまた、新しい現実存在基盤である。」<sup>(2)</sup> 被置性とは、外界と栄養環境にたいして閉鎖的であり、自立しているがゆえに、自らの活動のすべてに自己責任を負わされているという動物の本質的規定にほかならないが、この規定は、プレスナーの後続の人間学的諸規定のいわば萌芽形態であって、動物の位置性の根本規定である中心性および正対性を經由して、やがて動物界の一員でもあるわれわれ人間の、例えば世界とおのれとのあいだに分裂または裂け目があることを自覚するために、本来この世に確固たる自らの居場所または拠り所をもつことができないということを意味する「無場所性」という、多分に実存主義的な響きのする人間学的な根本法則へと展開していくことになる。

さて、閉鎖的な位置形式と被置性を本質的特徴とする動物は、おのれを取り巻く生命圏からいったん自己を閉ざして隔絶し、おのれの足で立たせられながら、自らの生存をおのれ自身の活動に懸けざるをえないから、おのれを取り巻く生命圏にたいして今度は媒介的に関係し、この生命圏のなかの生命循環のうちに媒介されたかたちで組み込まれなければならない。動物にその根本的な生存条件として課せられるのは、こうした媒介の活動をどのようにして成功裏に、つまり自らの生存と生殖に有利となるように行うかである。動物は、生命圏における自らの生存を懸けたこの課題を、ここでも生命に特有の形式的規定である「反対方向性 *die Gegensinnigkeit*」または「対向 *das Gegenüber*」といういわば弁証法的な関係に導かれて、自らを取り巻く環境

または媒体を受動的に受け入れるという関係か、またはこれとは反対に、自らを取り巻く環境または媒体に働きかけて、これをおのれに適合させることによって能動的に形態化するという関係をとらざるをえない。言うまでもなく、受動的な受け入れは対象を知覚する働きの発達につながるであろうし、能動的な形態化は対象に対して反作用する働きの発達させるであろう。こうした関係は、プレスナーによれば、動物的有機体の生命の存在と活動の、それ自体ア・プリアオリであるところの「可能性の条件」にほかならない。「この条件によって、動物の生命のすべての本質的諸徴表がそれらの統一において理解される」<sup>(3)</sup>と主張される所以である。

ここでこうした課題を受けて自らの生存条件として動物に要求されてくるのは、自らと媒体とのあいだに媒介的な関係を真に確立することであるが、こうした課題の解決は次のふたつの方向性において果たされなければならないであろう。そのひとつは、形態学的な方向性であって、この方向は動物の肉体的な諸器官と諸器官どうしの連結システムの形成と密接にかかわることになり、植物の場合の肉体諸組織どうしの並列的な接合とは反対に、ひとつの肉体内部における諸器官どうしのいわば分業と統一がシステムの的に完成されることである。もうひとつは、生理学的な方向性であって、動物の知覚作用、自発的運動、肉体内部の循環システム、呼吸組織、栄養摂取などの働きを強化することである。これらのいずれもが、動物の肉体内部における反対方向的な働きである、刺激を知覚しこれにたいして反応する働き、すなわち感覚・運動系の発達を飛躍的に促すことになる。これらの方向性のいずれもが前提としているのは、諸器官どうしの分化と統合という、これまた反対方向的な働きの統一である。そしてこのことは同時に、周辺的な諸器官とこれらを統合する器官である中枢神経組織との分化と統合を促進することになり、ここに中枢神経系によって統一された肉体諸器官どうしの発達した有機組織化が登場することになる。

動物的な有機体の大きな特徴である、発達した中枢神経系によって結合された肉体諸器官どうしのシステムには、もうひとつの大きな前進、質的な変化または高度化が達成されている。現象学的に考察した場合、植物がわれわれに現出するさいにもその内部に「中間項 *die Mitte*」, 「核心 *der Kern*」が存在し<sup>(4)</sup>, そのかぎり植物にも自己 *das Selbst* が備わっていたのだが、動物的な有機体においてはさらにそのうえに、これらの中間項, 核心, 自己は肉体諸器官を「所持する働き」*Haben* の主体となっている。つまり、有機的生命は植物的な段階ではたんなる自己でしかなかったが、動物の段階に至ってたんなる自己を脱して、おのれの肉体諸器官を所持または「所有する *besitzen*」主体となる。

植物と比較した場合、ここには注目すべきいくつかの変化が生じている。動物の生きた有機体は肉体諸器官を統一しているが、それはある中心によって肉体諸器官が統合されているかぎりにおいてであり、この有機体は直接に媒体または周辺領野と接触するのではなくて、おのれの諸器官をつうじて、つまりおのれの肉体諸器官を手段とし、これらによって媒介されることによって媒体または周辺領野と接触する。こうした有機体の肉体はもはやたんなる肉体ではな

くて、中心によって支配され、統合され、何らかのかたちで中心的な要素を刻印された肉体であり、そのかぎりにおいて肉体 Körper は身体 Leib に変化している。言い換えれば、ここでは肉体であることが肉体を所持することに变化しているのであって、プレスナーはこの事態を、フッサールの表現を借りて、「身体肉体 Leibkörper」と表現している。つまり、ここでは身体的な肉体（物体）、身体化された肉体が成立しているのである<sup>(5)</sup>。さらに、こうした関係では、肉体は二重化されたかたちで存在する。つまり、肉体はそれ自体として、肉体自身として、肉体諸器官として存在するが、中心または中枢神経系によって支配され伝達されたものとして、つまり中枢器官のなかに「代理されて repräsentiert」存在する。プレスナーによれば、中枢神経系とは肉体諸器官の「中枢的な再現前化 Repräsentation の器官」<sup>(6)</sup>にほかならない。それと同時に、こうした二重の関係は、肉体諸器官が肉体自身に依存するとともに、肉体自身から引き離されている、換言すれば、「際立たせられている abgehoben」ことを意味するだけではなくて、さらに肉体諸器官が肉体自身から「距離をとっている distanziert」ことをも意味する。それゆえに、プレスナーは植物の自己についてこう述べるのである。「植物もまた茎・葉・花・実を所有するが、しかし、植物の自己も、この自己の所有する働きも、ひとつの身体としての植物の肉体にたいして、現実的に対立したりはしない。」「自己は、植物の生きた全体性の性格にすぎないが、それにもかかわらず、位置的に見れば、肉体から際立たせられはしない。」<sup>(7)</sup>

すでに述べたように、プレスナーによれば、動物的な有機体が環境にたいしてもつ位置形式の閉鎖性から動物の本質的な諸特徴が導出される。動物はおのれの環境にたいして自立的にふるまい、おのれ自身が自立的であるのに対して、むしろ環境または生命圏の方が動物に開放されている。しかし他方では、動物は生命圏のうちに媒介的に組み込まれているのであって、もろもろの境界をそれ自身もたないとはいえ、その自立性は有限である。植物のように無機物から栄養分を合成しえない動物は、おのれの生命圏のなかでは本質的に欠乏した存在であり、栄養衝動・性衝動などの点で「原初的な充足不可能性」として規定されざるをえず、そのために休みなく衝動充足を求めて駆り立てられ、したがってその意味では本質的に平安を喪失し、闘争を行うことを常態化せざるをえない。プレスナー自身の言葉で言えば、「動物であるということとは、衝動の戦士であるということである。」<sup>(8)</sup>

ところで、動物的な有機体と人間との接点はどこにあるか。中枢的な伝達器官または再現前化の器官が動物に統一的にそなわっているということは、同時に動物がおのれの肉体諸器官を機能的に分離・分化させていて、いわば諸器官による分業のシステムを強化することでもあって、中枢の統合の強化と分業の強化とは相補的に連動しあう関係にある。したがって、このことは言い換えれば、「中心化が増大し純化されていくにつれて、ある種の外中心化 Dezentralisierung がこの中心化と共働しあう」<sup>(9)</sup>ということでもあり、このことは同時に「有機組織化の原理が高まっていくことを意味する。」<sup>(10)</sup>しかしプレスナーは、有機的なものの諸段階を規定し、それぞれの段階ごとの位置形式と有機組織化の原理との差異に注目して、それぞれの段階を低次

なものからより高次なものへと位置付けてはいるが、植物と動物とのあいだの、さらには動物と人間のあいだの連続的移行を決して念頭に置いて段階付けを行っているわけではない。それというのも、例えばプレスナーは、植物界と動物界との差異または境界線が経験的に観察される諸徴表によって確定されるものではありえないという信念をここでも強調して、こう述べているからである。「[植物と動物の] 両者の差異は、十分な実在性のうちでは観念的である。開放的な形式と閉鎖的な形式とは諸理念であって、現実の生きた肉体はこれらの理念にしたがって有機的でなければならない。生きたものは、有機的なものの道を行って行けば、これらの理念のうちへと入り込んでしまう。経験的なもののうちに植物界と動物界とのあいだの境界線を見つけ出すことはできないのである」<sup>(11)</sup>、と。

プレスナーは、植物と動物のあいだにはたとえさまざまな移行諸形態があるにしても、植物または動物だけにあるような諸性質は存在しないということだけではなくて、そもそも経験的に探求される諸徴表によって植物と動物の差異を確定しようとするのが、方法的に見れば不可能なことなのであり、植物的有機体と動物有機体とを可能にするような諸条件としての開放的および閉鎖的形式は、現実の生きた有機体がしたがわなければならない「諸理念」だと言うのである。これらの諸形式が現実の反映ではなくて理念だとされるかぎり、これらの諸形式のあいだの連続性は否定されることになる。プレスナーによって「理念とは、相互に高めあげるといふ働きの非連続的な多様性をなして、連続的前進という原理にしたがってひとつの段階から次の諸段階に達するという可能性をもたない」<sup>(12)</sup>とされているからである。プレスナーの哲学的人間学においては、ここでもまた、進化論的な発想と問題関心がまったく遮断されたままである。そしてまた、後に詳細に議論されることになるが、ここでプレスナーが動物の限界にかんして「動物的な有機体にとっては地平線は存在しないが、それはこの有機体が地平線を知覚する手段をまだ所有していないのと同様である」<sup>(13)</sup>と示唆的に述べていることに端的に示されているように、この「地平線」なるものを知覚しうるかどうかどうかというメルクマールが、やがて動物と人間とのあいだの橋渡ししえない質的差異を叙述するさいの伏線となるであろう。

## (2) 中心性と正対性

すでに述べたように、プレスナーによれば、動物的な有機体の段階において初めて、本来の自己、自己らしい自己、主体としての自己が成立する。彼自身、「空間をそなえた中間項、核心は所持の主体であり、言い換えれば自己である。この自己は固有の身体肉体 [物体] Leibkörper から際立たせられつつ、同時に中間項を形成して、肉体はこの中間項の周囲では閉鎖的であり、肉体とこれを取り囲む位置領野はこの中間項に向かって総体的に収斂していく」<sup>(14)</sup>と述べているとおりである。動物有機体の、中間項とも核心とも、そしてまた内部存在とも言い換えられる自己は、肉体諸器官とおのれ自身とを連結する中枢器官の存在によって、動物有機



体の中心とならざるをえないから、ここでもまた、この有機体にとっては中心性 Zentralität が根本規定である。先にも述べたとおり、こうして肉体と身体との、すなわち肉体と、中心によって支配され刻印された肉体＝身体との二重のアスペクトが生ずるが、この二重のアスペクトは同時に肉体それ自身と肉体の中の空間・時間具有的な内部存在との転換であり、言い換えれば、肉体それ自身から肉体のなかの内部存在へと伝達される方向と、肉体のなかの内部存在から肉体それ自身へと伝達される方向との、二義的または反対方向的な統一をも意味する。空間・時間具有性 Raum-zeithaftigkeit とは、事物のたんなる入れ物として考えられた物理的な意味での絶対空間や事物のたんなる物理的属性としての時間という意味ではなくて、とりわけ人間を含めた動物的な有機体がおのれのうちに内的な時間を所有し、外部環境にたいしてはおのれ自身を空間的に主張しようということの、プレスナーによる現象学的な表現にほかならない。したがって動物は、植物とは異なって「ただたんに『所持する』自己であるだけではなくて、特種な種類の自己であり、再帰関係的 rückbezüglich な自己、またはひとつの再帰的自己 ein Sich である。」<sup>(15)</sup>

ところで、有機的に組織された肉体およびその諸器官と、この有機体の内部存在または中心または自己とが際立たせられるとともに引き離され、そのかぎりで両者のあいだに距離が存在するとすれば、そしてこの内部存在または中心としての自己が、ある程度自己関係的におのれを起点とし、おのれの肉体とその諸器官に何らかの伝達を行って、その伝達の結果がおのれ自身に還帰する終点でもあるとすれば、この有機体には自発性、すなわち自発的に行為するという可能性が与えられている。プレスナーによれば、「どの動物も、可能性からすれば、…固有の身体と見知らぬ諸内容とがあたえられている、ひとつの中心である。動物は、肉体的に見れば、自分にたいして現在の、おのれから際立たせられたある周辺領野のなかに、言い換えれば対向 das Gegenüber という関係のなかに生きている。動物はその限りににおいて意識的 bewußt であり、おのれに対立しているものを知覚し、中心から外に出て、すなわち自発的 spontan に反応する。つまり動物は行為する handeln のである。」<sup>(16)</sup> プレスナーは、動物の位置性によって特徴的なこうした閉鎖的な形式の諸性質と構造のうちに意識性の基礎を見ようとし、動物にたいして、少なくともその可能性において、自発性にもとづく行為、つまりおのれに対立するものを知覚するとともにこれにたいして自発的に反応する行為の存在を見ようとする。動物は、たとえ周辺領野のうちによるべなく自らの足で立たせられながらも、そしてたえず不安と動揺のなかで、衝動を充足する欲求に駆り立てられ、選択を強制されながらも、おのれの「意識」によって自発的に行為しようのである。

意識性、自発性、行為などの哲学的語彙に明らかなように、この点ではプレスナーが植物や動物を考察するにあたって、ドイツ古典哲学と観念論的思考の伝統を確実に受け継ぎながら、当時の最新の生物学・動物行動学・環境世界研究の成果を自らの人間学に生かそうと努めていることが分かる。植物に自己または内的存在を、動物に意識的で自発的な「行為」を認め

るプレスナーのこうした視点の重要性は、マックス・シェーラーによって開始されアルノルト・ゲーレンへと受け継がれていく「哲学的人間学」の思想潮流の系譜のなかにプレスナーを位置付けて、とりわけゲーレンの動物論とプレスナーのそれとを比較して見れば、より良く理解されるであろう。その創始者シェーラーの人間学理論は、周知のように、動物にたいする人間の独自性を、生命世界を超えた高みに位置付けられる「精神」の作用に求めて、形而上学的な性格を強く残すことになったとはいえ、生命世界を構成する心的なものの境界と生命あるものの境界とを同一と見なし、意識も表象も欠落してはいるが感受衝迫 *Gefühlsdrang* の能力をもつ植物に心 *Seele* の存在と「対自存在・内的存在」を認め、意識が少なくとも感覚の原始的反射以上の機構をもつ動物にそなわる能力とし、そして本能の次に位置付けられる実践的知能について、「最も賢いチンパンジーとたんに技術者として見られたエディソンとのあいだの差異は量的なものでしかない」<sup>(17)</sup>と述べて、いまだに体験したことのない新しい事態の洞察とこれに対処する実践的知能という点では、最も賢い類人猿と人間との差異は量的なものでしかないと見なした。しかし、他方ではシェーラーは「動物は自己 *sich* を所有せず、自己を意のままにしない。そしてそれゆえに、自分をも意識しない」<sup>(18)</sup>として、プレスナーとの差異を明らかに示している。これに対して、ゲーレンの人間学においては、植物にも、植物の心的能力にもほとんど言及せずに、したがって生命世界を正確に段階づける作業を断念し、しかも未来を予見しつつ「行為する能力」を人間固有のものとすることによって、衝動圧によって束縛されて動きのとれない動物には、行為と意識とのあいだに横たわる「空隙 *Hiatus*」によって衝動を制御・延引・反転することが体質的・原理的に不可能だと考えられている<sup>(19)</sup>。したがって、植物と動物、そしてこれらの位置性にかんするプレスナーの見解は、意識をどう定義するのかというきわめて困難な問題の解決を課題として残しながらも、やや硬直した感じのするゲーレンよりもはるかに科学的で柔軟であり、またシェーラーの人間学に含まれる積極的な学問的遺産を継承しながら、これら両者を超える視点を一定程度提示しているといえよう。この点については、本論文のなかでさらに総括的に論評する予定であるが、今ここでこのことだけに注意しておきたい。

ところで、プレスナーによれば、動物がおのれと環境とにたいして取る位置性の閉鎖的形式がもたらすその次の本質的特徴は「正対性 *Frontalität*」である。プレスナーは正対性の概念についてまずこう述べている。「見知らぬ圏域は、動物には全体性として見通しがきかないままであり、動物はこの圏域に応答しうが、しかし、決してこれを意のままにすることはできず、この見知らぬ圏域に対向して、自分自身の足で立たせられ、自分自身のなかに埋没しながら、覆い隠されると同時に、脅かされて生きている。正対性というこの特殊な位置は、すなわち見知らぬ所与性という周辺領野に対して向けられた現実存在という位置は、方向の異なったふたつの道を動物の有機組織のために開いている。」<sup>(20)</sup>だが、動物の生活のうちに潜むこうしたいわば実存的契機が強調されすぎたこうした規定だけでは、正対性というカテゴリーのうちに込



められた特殊な意味は理解されにくいであろう。プレスナーが言及しているそのほかのふたつの箇所を参照してみよう。

ひとつは「閉鎖的な形式は、固有の肉体にたいする核心距離 Kerndistanz によって抜きん出ていて、正対性、対向被置性 Gegenübergestelltheit という性格をもち、見知らぬ所与性である周辺領野へと向けられた、所与性に対向して開示されると同時にある裂け目によって所与性から分離された、それゆえに閉塞的な現実存在の性格をもっている。閉塞的な現実存在とはまさしく意識の状況のことをいうのである…」<sup>(21)</sup> という箇所である。もうひとつは、後述するヴォルフガング・ケーラーのチンパンジーを初めとするいくつかの動物の知能実験のなかで用いられた迂回路（迷路）にかんする叙述であって、そこでは「その場合、迂回路ということで、この生物と目標とのあいだにある最短で真っすぐな連絡路からはずれたどの曲がり道も、はっきりと目に見えて分かっていなくてはならない。この真っすぐな道は、感覚諸器官と運動諸器官とをつうじて有機体の原方向となっている自然的な正対傾向 Frontaltendenz というかたちで、（環境領野のなかの刺激がふだん変えられることのないバランスを保っている場合には）無媒介に目標へと通じている」<sup>(22)</sup> と述べられている。

つまるところ、プレスナーにとって正対性とは何よりもまず、動物的な有機体がおのれを取り巻く周囲の環境にたいしてとる位置性の二次的形式であって、動物が周囲の環境を向こう側に回して対向的に立たせられていること、つまり動物がいやがうえにも周囲の環境にたいして無媒介に向き合わされ対峙させられていることにほかならない。Frontalität という語のなかに含まれている Front とは、何らかの建造物の前面または正面を意味するとともに、軍隊用語としては戦闘の前面、すなわち前線を意味するが、動物の正対性とはまさしくこの含意にふさわしく、動物がおのれを取り巻く周囲の環境にたいして、「休息なき衝動の戦士」として生命活動の最前線に立ちながら、しかし絶えざる不安と動揺のうちに、真っ向から直接に向き合っていること、したがって周囲環境にたいしておのれ的手段や術策を介したり、その背後に第三者を介して間接的にこれに働きかけたりなどの媒介的・迂回的な、複雑な行動を取りえないということをも意味するであろう。プレスナーによれば、動物の有機体と周囲の環境とのあいだの距離と裂け目は現実存在するが、動物と目標とのあいだはもっぱら最短距離によってのみ隔てられており、動物の生活通路は無媒介に真っすぐに、こうした衝動と欲求の対象物となる目標へと通じている。正対性のこうした諸規定とその意義は、やがてプレスナーが動物の位置形式と人間のそれとを直接に対比するところでさらに明らかにされよう。

### (3) 動物の限界と〈ここ—今〉への埋没

ところでプレスナーは、今度は動物の内面に考察の視点を移動させながら、特徴的な現象学的な仕方でこれをこう規定している。「動物は、おのれのなかでおのれから際立たせられていて、〈ここ〉をつうじて媒介されるような諸アスペクトの転換の統一である。」<sup>(23)</sup> ここでプレスナー

が言う諸アスペクトの転換とは、動物にとっての外部存在または周囲の環境と、動物のなかの内部存在とが、お互いに反対方向的または双方向的に関係し合っているということを指示している。正対性を位置性の第二次的な形式とする動物有機体は、周辺領野にたいするその正対性のゆえに、空間的・場所的には〈ここ〉によって、時間的には〈今〉によって規定され、これらとの関係、そしてこれらによる制約と制限のなかを動いている。プレスナーによれば、動物にあつては〈ここ〉と〈今〉とは絶対的であつて、今述べた動物の諸アスペクトの転換は〈ここ〉と〈今〉から引き離されたり相対化されたりすることなしに、むしろ〈ここ〉と〈今〉とのうちに埋没している。ここに動物有機体の根本的な限界が存在する。プレスナー自身の言葉で言えば、「[動物] 有機体は、おのれのなかでおのれを支配しながら、肉体を内部から衝動的に動かしながら、〈ここ〉『の中に』あり、有機体の現実存在は、固有の肉体充実の中心のうちに置かれていて、[動物] 有機体は、位置的な空間・時間連合の中間項として、この連合のなかに埋没している。」<sup>(24)</sup>「動物にとっての制限は次のことにある。それは、動物に与えられているすべてのもの、つまり媒体と固有の肉体身体 Körperleib とは、動物の〈それ自身における存在〉、〈肉体としての存在〉を除けば、〈ここー今〉にたいして関係している、ということである。動物がそれ自身であるかぎり、動物は〈ここー今〉のなかに埋没している。」<sup>(25)</sup>

もちろん、〈ここー今〉概念を駆使したプレスナーのこうした理論は、「われわれが見たように、動物はまったく具体的なものと現実性のうちに生きている。すべての現実性には、それぞれの場合に応じて、空間における位置と時間における位置、つまり〈今とここ ein Jetzt und Hier〉とが結びついており、さらに感性的知覚がひとつの『アスペクト』から与えるような偶然的な様存在 Sosein が結びついている」<sup>(26)</sup>と述べたシェーラーの着想を継承しているであろう。そしてさらに哲学史を溯れば、その素材は、『精神現象学』の「感覚的確信」の章のなかで、われわれには感覚が真実を伝え、感覚的確信が対象の豊かさをそのままにとらえているように見えはするものの、感覚的確信がひとたび眼前にあるこの物を「今」と「ここ」として規定するとしても、時間が経過し、目を周囲にやればたちまち「今」と「ここ」が消失してその非真理性を暴露し、その代わりに普遍的な時間・空間の連続が真理として立ち現れることを示した、あのヘーゲルの叙述にまでいきつくであろう。

この難解なプレスナーの叙述を、できる限り分かりやすくパラフレーズしながら解説してみよう。動物の位置性の第二次的特徴としての正対性は、動物と周辺領野とを〈ここー今〉のうちで対向・対峙させる。動物の周辺領野は、動物にとってはすでに出来上がって存在しており、その意味では動物にとっての〈ここ〉は動物に常に先行しているが、動物と周辺領野との〈ここ〉での出会いは〈今〉のうちにある。動物は固有の肉体とその諸器官をつうじて〈ここー今〉からもろもろの刺激と作用を受け取り、〈ここー今〉に対して働きかけて反作用するが、この〈ここー今〉そのものは、動物にとっては際立っておらず、動物から引き離されてはいない。それゆえに、〈ここー今〉は動物には真の意味で対象的となつてはいない。〈ここー今〉は動物の具

体的な行為の遂行を通り抜けて、動物自身とともにある。この意味では、動物にとっての〈ここー今〉は絶えざる「通り抜けて」Hindurchである。動物固有の肉体とその外部の周辺領野との関係は同心円的 konzentrisch であって、いまだに外中心的でも脱中心的 exzentrisch でもありえない。動物はたしかに〈ここー今〉にたいして関係し、動物にはおのれの肉体身体と外部の周辺領野とが〈今〉のうちに現存しているが、〈ここー今〉の性格は与えられておらず、したがって動物は真の意味で現代的 gegenwärtig となっていない。真の意味での現在とは、過去と未来とをそれ自身のうちに含み、これらとともに対象化されていなければならないからである。動物はおのれの肉体を身体として所持しはするが、このおのれの所持そのものは対象とされてはおらず、動物にとっては隠されたままだ、というわけである。

ところで、動物の位置性にまつわる限界にかんするこうした錯綜した叙述のなかで、プレスナーはいったい何をわれわれに訴えようとしているのか。われわれにとっては、動物の限界にかんするプレスナーのさまざまな特徴付けは、次の一点に集約されうるように思われる。それは動物の中心であるところの「自己」がいまだに真の「自我」Ich にまで到達するには至っていないということにはかならないであろう。このことは、プレスナー自身の次の言葉で示唆されている。「動物が身体であるかぎり、そのかぎりでは動物は与えられているとともに現代的であって、動物は〈ここー今〉のうちにある全肉体として、肉体に影響を及ぼすことができるし、おのれのインパルスが『ふさわしい』結果を得られるようにすることができる。しかし、全肉体はいまだ総体的に反省的となっているわけではない。」<sup>(27)</sup> 動物の「この立場の中心は、動物には知覚されうるかたちで与えられてはおらず、また固有の内面性をもつ、『おのれの背後に』ある消失点 Fluchtpunkt という様式で与えられていない……。」<sup>(28)</sup> つまり、動物の自己は、まだ「眺望するための視点 Blickpunkt für eine Sicht」, 「意識性の主観点」<sup>(29)</sup> を手に入れてはいないのである。動物の自己がおのれの全肉体を反省し、ある程度おのれを自覚して再帰的となった自己が、さらに完全な反省的・再帰的關係を手に入れ、〈ここー今〉、そして周辺領野とおのれの肉体から完全に身を引き離して、過去に溯るとともに未来へも貫入する働きを獲得したとき、このときこの自己は初めて「自我」となるであろう。このときには、この生物は初めて「動物は原初的な被適応性という圏域を突破する手段をもたないから、有限である」<sup>(30)</sup> と叙述されるような状態から真に離脱することができることになろう。言うまでもなく、この生物とは、後述する、脱中心的位置形式の所持者としての人間にかならない。

#### (4) 正対性のふたつの可能性または方向性

プレスナーにとっては、動物にとって意識が成立する可能性は、感覚諸器官をつうじて外部世界からの刺激を知覚する受容の働きと、その後に肉体諸器官を用いて外部世界にたいして何らかの反応を作動させて介入するという反作用の働きとの「あいだ Zwischen」にある。言い換えれば、動物有機体の知覚と反作用、刺激と反応という、感覚運動的な対抗関係のはざまに、

連結する働きのほかに中断、すなわち「間隙 Hiatus」が存在することが、論理的に見た場合、意識の発生基盤である。だからプレスナーはこう述べている。「知覚は、抑制された興奮と等しい価値をもち、作用は抑制を解除された興奮と等しい価値をもつ。両者のあいだには意識の領域が広がっていて、知覚から作用への移行は、この意識の領域を通り抜けて行われる。だから、意識の領域は空間具有的な内的境界であり、外からやってくるものと外へ行くものとのあいだの、時間をそなえた休止であり、空隙であり、内部具有的な裂け目である…。」<sup>(31)</sup>動物有機体が、知覚をつうじて受容する刺激に適切に応答して自己保存の戦略に成功するためには、知覚と作用とのあいだにあるこうした間隙にできるかぎり適切な仕方で橋渡しし、しかもその時間的な中断をできるかぎり狭めなければならないであろう。プレスナーによれば、ここに意識が成立する意味と必然性がある。動物有機体にとっては、こうした戦略に成功するためには、ここでふたつの道が開かれている。そのひとつは、意識の可能性が開かれているにもかかわらず、この可能性を追求せず、逆に意識を遮断し、反射というメカニズムを発達させることで、間隙を埋めるという道であって、これは外中心化 Dezentralisation と規定される。もうひとつは、意識の可能性を追求し、連合的記憶を強化し経験を蓄積して、これを意識の働きによって調整することで環境応答における失敗の可能性をできるだけ排除し、意識を強化するという道であって、これは中心化 Zentralisation と規定される。これらのそれぞれについてやや詳細に検討することにしよう。

### 〈意識を遮断する道〉

動物有機体が、正対性をもたらすふたつの可能性のうち、意識を遮断してその代わりに反射によって知覚と作用とのあいだの間隙を連結する道、すなわち外中心化の方向を選択した場合、この動物有機体は外中心的な有機組織化の理念をそなえたタイプの生命体にぞくすることになる。意識を遮断するということは、もちろん、意識をまったくなくすることを意味しはしない。そうではなくて、動物有機体が外界からの刺激にたいして適切かつ迅速に反応するために、状況に応じて知覚どうしを連合したり、経験や学習によって状況を判断する能力を発達させる必要がわずかしき存在しない、またはわずかしき存在しなくても良いという立場の選択にほかならない。

問題のこの場面でプレスナーは、動物の環境世界にかんするフォン・ユクスキュルの周知の研究を全面的に援用する。よく知られているように、外界から刺激を受容するとともにこれにたいして生物学的に適切な反応を行うことは動物の生存にかかわる根本事態であるが、今日の動物行動学研究の先駆者とも評価されるフォン・ユクスキュルの、動物の環境世界にかんする研究はまさしく、動物種ごとに異なる、こうした知覚と反応の関係を、それぞれの動物種ごとに成立している固有の環境世界 Umwelt として探究したものである。彼の方法論的立場はしばしばカント主義とも評されたが、動物種の固有の環境世界を人間の側から第三者的に考えるの

ではなくて、それぞれの動物の内部世界にどのように周囲の環境が映し出されているのかを動物の知覚の側に立って探究しようとした点で、革新的な発想と視点とを含んでいたといえよう。しかし、他方では、進化論とダーウィニズムに対する反感もあって、動物の知覚世界および作用世界（知覚器官と実行器官）と、これらのあいだで標識として働くものとの、動物種に固有の機能的連環（機能環）だけでなく、この機能環に対応して環境世界の側に形成される「反対構成」をも探究しようとしたフォン・ユクスキュルの探究は、こうした機能環という関係がなぜ、いかにして形成されたのかをいわば不問に付して、「もろもろの主体と客体とをバランスよく包括している自然のなかに、ある普遍的な計画性が現存している」<sup>(32)</sup>と彼自身が言明していることに示されているように、自然の「構成計画」として目的論的に位置付けようとした点では、大きな問題点をも内包していた<sup>(33)</sup>。

プレスナーにとって、意識の可能性をもちながら意識を回避することの利点は、動物有機体にとって必要のない刺激は遮断されてその動物の周辺領野に立ち現れることがなく、動物にとって必要な特定の刺激のみが反作用の対象として立ち現れるというように、まさしく機能環が機能的に合理化され、そのことによって動物有機体が自らの行動において失敗する機会が著しく減少するという点にある。フォン・ユクスキュルがきわめて印象的に指摘したように、温血動物の血液が生殖活動にとって不可欠であるマダニの雌にとっては、温血動物の皮膚表面から発散されるある種の酪酸に反応することだけが必要な唯一の刺激であるように、それぞれの動物はそれぞれの生存と繁殖活動にふさわしくまことに巧みに作られた、知覚に与えられる特定の刺激とこれにたいする特定の反応という、固有の環境世界の図式を所有している。プレスナーはこう述べて、彼がフォン・ユクスキュルとともに哲学的な観点を共有していることを示している。「外中心的に有機組織化された動物では、計画の統一がインパルスの統一の代わりを務めている。周辺領野のなかの個々の諸対象は、ある純粋な信号価値をもっている諸刺激が、当該の動物の計画にとって特徴的なある特定の結合を行うことによってのみ、注意を引き付けることができるように、個々のインパルスが活動にとってもつ意義も狭められていて、場合によってはまったく阻止されている。」<sup>(34)</sup>

動物有機体は、だからといって、本能と反射とにのみ従う完全な自動機械なのではない。もしも意識が完全に喪失してしまうような事態が起ころうとすれば、おそらく知覚作用や知覚領域の存在さえも不要になってしまうことであろう。しかし、実に巧みに構成されているかに見えるこうした動物の構成計画もまた、見方と視点を変えるならば、多くの弱点を秘めていると言わざるをえない。プレスナーによれば、動物の活動計画は網のようなものであって、そのなかに世界がとらえられるのだが、動物の環境世界のなかでは食餌、防御、交尾、産卵などの実践的な目的がまったく支配的であって、そこでは運動機能が圧倒的に優位を占めている。動物の環境世界においては「知覚領域のなかにあるデータが生じるとすれば、それはシグナル[信号]として現前化されているのであって、決して客体として現前化されているのではない。」<sup>(35)</sup>



つまり、動物にあっては、知覚と反作用との相関関係のうち、後者の反作用または反応という領域が重点であって、この支配的な活動領域だけがこの動物の欲求と衝動の相関物として客体を含むにすぎない。これにたいして、知覚の領域は反作用または反応に従属していて、知覚に与えられたものの総体のなかに対象が客体として意義づけられているのではない。このことは、動物には「周辺領野の客観的な統一が欠けているということの代償である。」<sup>(36)</sup>したがって、こうした動物に与えられた諸物は真の客観性をも欠くことになる。「そのわけは、これらの物が、感覚から見ればシグナルであり、運動から見れば要求充足であり、動物主体と周辺領野とを統一へと結び付けている機能環（ユクスキュル）にのなかにすっかり埋没しているからである。」<sup>(37)</sup>この段階の動物は、いまだ閉鎖的な有機組織の理念を完全に体现しておらず、動物の中心もいまだ固有の肉体を四肢・肉体諸器官などによって再現前化することがなく、またこの動物に対向する周辺領野もまた、諸境界と内部構造をもたず、この動物が反射的に反応するたんに純粋な記号領域にすぎない。この動物にとっては、自己自身を対象化する可能性はいまだ閉ざされている、というのである。

#### 〈意識を強化する道〉

すでに述べたように、プレスナーによれば、外中心的に有機組織化された動物にあっては、知覚領域と作用領域とが相関していながらも、後者が優位にあるために、基本的に分裂をきたしている。この弱点を補うかたちで登場するのが、中心的な、もっと正確に言えば、中心集散的な有機組織化の理念によって導かれた動物のタイプである。このタイプは、知覚にもとづき、感覚諸器官をつうじて、周辺領野を客観的に見渡すとともに、意識を強化し、連合能力または学習能力を高めることによって、主体と周辺領野とのあいだの適切な調整を行うことをその生存条件とする。この動物のタイプの場合もまた、刺激と反応との相関関係によって行動しはするが、この動物の周辺領野は初めて「互いに並列し、互いに継起する諸物」<sup>(38)</sup>として受け止められ、初めて知覚にとって本来の所与が所与として成立することになる。この動物は初めて本来の主体として、知覚にもとづき、知覚によって所与の客観的な統一とそのコントロールとを主体的に主導する。ここでは、外中心的な動物のタイプの運動優位に代わって、感覚優位の立場が支配的となり、知覚が作用領域と活動とをコントロールし、その程度は動物の中心化または中枢神経系の強化が進行するにつれてますます増大する。「生物は、この段階において、生物が実存的に委ねられている行為諸客体の領域に直面することによって、最大の自由度、最強の力の充実に獲得する。」<sup>(39)</sup>しかし、プレスナーによれば、それと同時にこの動物には、新たな困難が待ち受けており、この動物の周辺領野が広くなり、行動が広い範囲にわたればわたるほど、この動物は多様な諸客体を相手にすることになり、それゆえにそのなかに自らの欲求充足の手段と生存のチャンスを見いだすことが難しくなり、成功を求めるにもかかわらず失敗する機会が増大する。そのためにはこの動物は、閉鎖的な形式の有機組織の原理を強化する道、

すなわち、肉體諸器官と中枢器官とをもう一度閉鎖的に集中して、感覚運動的な諸機能の圏域を高度に強化する道を進まなければならない。

そこで、こうした必要に応じて登場するのが、中心集中的な有機組織をそなえた動物の体制である。プレスナー自身の言葉で言えば、「だがもし、閉鎖的な形式という有機組織原理が肉体の運動様式へと拡張され、肉體それ自身が計画統一であるような、感覚運動的な諸機能の圏が、中枢器官のなかでもう一度閉鎖されて、動物が周辺領野のなかで行われるおのれの運動を感知するとすれば、動物は自己を感知し、おのれの身体を感知し、おのれ自身によって占められた圏域を感知する。周辺領野は、固有の境界とともにおのれから遠ざかって、構造を獲得する。動物は今や…おのれがつかんだり話したりする働きを、攻撃したり逃走したりする働きを、成功したり失敗したりする働きを感覚する。動物は今度は、おのれの諸活動を統制し、インパルス的に発動するとともにこれらにブレーキをかけ、諸活動の進行をコントロールするとともに修正するという状況に置かれている。動物は今や周辺領野を掌握しているのを感じ取り、周辺領野が介入するのを感じ取るのと同様に、自分を掌握するようになったのである。」<sup>(40)</sup> この動物にとっては、周辺領野は、純粋な知覚領域としてではなくて、知覚・作用領域として、むしろ活動領域として現前化されている。

プレスナーの叙述に従えば、この動物は、おのれとおのれの周辺領野とを先行的に所持する。外中心化された有機組織をもつ動物にとって純粋で瞬間的な信号領野であったものが、この動物にとっては具体的な現在における諸可能性の領野であり、おのれの活動の図式に対応する構造をそなえた領野でもある。この領野においては、もろもろの物がさまざまな感性的諸データを核心に関係させながら立ち現れ、「知覚領域の内容が、活動領域として、待ち受ける運動のチャンスを対象的に示している。」<sup>(41)</sup> したがって、この動物にとっては、おのれの周辺領野のうちに、諸物が「掌握しやすさ」 Griffigkeit および「交流しやすさ」 Umgänglichkeit とともに感覚複合体のなかに立ち現れており、この動物の「作用」 Akt は、外中心的に有機組織化された動物とは異なって、感性的な物質に直接出会うのではなくて、特定の構造のなかの感性的な物質に出会うという内容をもつ。つまり、この動物の「作用」は、たんなる知覚作用から、直観作用 Anschauen という性格へと変化している、というのである<sup>(42)</sup>。

ここで、プレスナーは適切にも、中心集中的な有機組織による感覚運動的な機能作用の連結と、知覚される周辺領野のなかにもろもろの物が現われることとが対応する以上、「これらの物はどのようにして大脳によって生物に知覚できるようになるのか」<sup>(43)</sup> という問いを提起する。この問いによってプレスナーが、大型類人猿と人間とのあいだに「実践的知能」という点では質的差異を認めようとはせずに、またこの本質的差異を、生命世界を超えた原理としての「精神」の作用に求めながらも、知能と「精神」の機能を保証しているはずの身体的器官としての大脳および大脳皮質の器質上の共通性と差異性をついに本格的に問題とすることがなかったシェーラー<sup>(44)</sup>、そしてシェーラーよりもいっそうショーペンハウアー——ニーチェ的

な非合理主義的伝統に回帰することによって、「身体という大理性」<sup>(45)</sup>を問題としながらも理性・知性・精神を問題とせず、人間の身体諸器官の欠陥・原始性・非特殊性とその「代償」に固執して、人間の進化に特徴的な「大脳化」という身体的な特殊化をついにほとんど問題にすることがなかったアルノルト・ゲーレンとは大いに異なっていることが了解されるであろう。哲学的人間学の系譜においては、プレスナーによって初めて、たとえ一定の限界内であるとしても、脳および大脳がその本来の生物学的意味において考察の対象とされるのである。

プレスナーによれば、生物の活動が「適切である」ためにはこの生物の「舵取り」が必要である。この必要に応じて、生物の身体諸器官とその機能、そして感覚諸器官に対応して外部の周辺領野を組み立てるために、これらの諸器官を代理する分野が脳のなかに生じることになる。そして、この動物有機体と外部の周辺領野との共存の関係が深化し、複雑になるにつれて、そしてまたこの動物有機体の知覚と作用とを連結する行動の図式または公式が多様になるにつれて、脳もまた事物を制御する力と範囲とを増していく。例えば、プレスナーはこう述べている。

「中枢神経系の比較解剖学と生理学とは、しだいに複雑さを増していく段階系列全体のなかに脳を位置付けることができるが、この系列が意味するのは、物、物のお互いにたいする関係、それに物と固有の肉体との関係をいっそう鋭く把握しうるように向上していくということであり、そして、固有の運動能力に応じて物をいっそう強く制御できるように向上していくということである」<sup>(46)</sup>と。脳が左・右、前・後、上・下などの方向の差異から始まって、運動・像・周辺領野のなかのこれらの状況を再現前化するようになっていき、そして、平衡諸器官と空間感覚諸器官が形成されて状況変化に対する中立性が獲得されるところにまで進むことによって、この生物はおのれのうちにおのれの時間・空間的な座標系を所有するようになる。「この有機体は、時間・空間にもとづいて、おのれの空間的・時間的な配置の確固とした座標を所有している。こうした制限を受けながら、この座標は、空間・時間具有的な〈ここ一今〉を形成する生物の位置性性格に対応している。この座標は、空間性が空間具有性に対応し、時間性が時間具有性に対応するように、位置性性格に対応する。」<sup>(47)</sup>

要するに、プレスナーは、脳・身体諸器官と意識とのあいだの関係を考察する場合でも、心身平行論や相互作用論を退けて、生物とこれを取り巻き、その内部世界に対応する外部世界または周辺領野との密接な関係における段階系列のなかにおいて考察しようとしており、あくまでも生物が環境にたいして取る位置的性格のなかに位置付けて理解しようとする。このプレスナーの姿勢は、「受容器と脳が分化していればいるほど、呼び覚まされる興奮はいっそう多彩になり、休止も、したがって位置領野の構造もいっそう多様になる。感覚的な（そして運動的な）機構の神経的な興奮は、生物にたいしては、あの中間位置を受け入れるそのつどの機会だけを生み出すが、生物の意識的な生活は、この中間位置として、この中間位置のなかで営まれている」<sup>(48)</sup>という叙述のなかにも、顕著に見られよう。

## (5) 本能・知能・意識

プレスナーは、外中心化された有機組織をもつ動物と中心化された有機組織をもつ動物とを、現象学的手法を用いてそれぞれの動物の知覚世界にまで立ち入って詳細に叙述しながら、それぞれの動物の内部世界の差異を説明しようとしているのだが、この叙述が微細にわたればわたるほど、そして真に迫れば迫るほど、われわれはこの問題局面においてひとつの重大な問いを発したくなるのを躊躇することができない。それは、プレスナーの叙述のみならず、動物心理学ないし比較心理学が一般に、いかなる方法的な手続きを自らの真理性の基準としうるのか、いかなる方法的根拠をもって動物の内部世界の描写を真となしうるのかという問いである。プレスナーはもちろん、こうした問いが発せられる可能性を十分に意識しながら、自らと動物心理学の方法論的観点にかんしてこう述べている。動物心理学または比較心理学は、たんなる刺激と運動の生理学とも、またフォン・ユクスキュルのような生命計画の探究という意義ある仕事とも異なって、擬人化や二世界論というデカルト主義をとともに退けながら、位置性の諸問題が生ずる問題状況を踏まえつつも「生物の行動をその意識状態にもとづいて解釈する」<sup>(49)</sup>という試みを行わねばならず、そしてここで「動物を機械としてではなくて、行動の生きた中心としてとらえ、生命にふさわしい諸概念を解釈のために用いる」ような「解釈の客観的な訓練」<sup>(50)</sup>がなされねばならない、と。現象学的な問題局面に解釈学的手法を適用することで動物の内部世界の考察に客観性と真理性とを保証しようとするプレスナーの方法がどこまでその妥当性を要求しうるかは、動物の本能・知能・歴史的反応基盤などにかんするプレスナーの後続の考察にそいながら、逐次検証されることになる。

さて、プレスナーによれば、中心集中的な有機組織をそなえた動物の活動を支えるものとして現れるのが、本能 Instinkt と経験とである。プレスナーはまず「観照の幅が増大するにつれてこれから生ずる不確実性を補うのが、本能と経験である。本能は、遺伝によって個体に刻印されているような先行存在 Vorwegsein にもとづいて不確実さを補い、経験は、個体が自分だけで切り抜けてきた生活の既存存在 Gewesensein にもとづいて、不確実さを補う」<sup>(51)</sup>と述べて、本能にかんする論考を開始する。本能にかんしては、今日なおさまざまな見解がありうるにしても、それが経験や学習によらずに生得的および遺伝的に受け継がれてきた行動様式であって、当該の生物の自己保存的または利他的行動として意味にかなったものであるとともに、一定の固定した恒常的なリズムにしたがって展開し、個体ではなくて種としての行動に役立つものである反面、環境世界の特殊な構造にたいする特種な反応であるからこそ、この構造の多少の変化に対応する柔軟さを欠いた、融通がきかず、硬直したものでもある、というのが一般的な定義であろう。ここで、当時の生物学研究における本能にかんする諸見解について少しだけ触れておけば、まず、かつて本能がたんなる屈性や趨性というような機械的に考えられた傾向性と同一であると見なす立場が主張されたことがあるし、またジェニングスのように、本

能が生物にそなわる反射的行動の組み合わせないしその連鎖であると考えた立場があったし、そしてスペンサーのように、生物の習慣化された行動が後に世代に遺伝したものとする見解、さらにヴントのように、生物の知的な行動が後になって自動化したものとする見解などがあった<sup>(52)</sup>。

プレスナーは、シェーラーや当時の動物心理学者と同様に、こうした生物学者・心理学者たちの見解を退けて、本能にかんする自らの基本的信念をこう展開する。「本能とは、生きた行動を考慮して、種類と幅から見れば、肉体全体がおのれの諸器官のために形態学的・機能的な観点で示しているものである。それは、動物にとっては所与性となる世界の諸部分のための、動物の意識または動物の周辺領野のための（それ自身、孤立させられるべきではない）前提条件であり、枠組みであり、選択原理である。」<sup>(53)</sup> プレスナー独自の本能概念によって特徴的なのは、彼がこの引用のすぐ後の箇所でも「本能は意識を形成し、意識を担っている」<sup>(54)</sup>と述べているように、一部の行動主義者やパブロフ主義者などのような機械論者たちが本能概念を無意識の状態に結び付けて、反射的な行動の連鎖として理解しようとしたのとは異なって、本能を意識概念の単純な反対物とは考えずに、むしろ動物の意識概念を広く理解して、そのなかに本能を積極的に位置付けようとしていることである。プレスナーは、機械論者が動物の行動を問題にするさいに意識をできるかぎり避けて通ったり、意識を、反射が中心となる機械的過程の随伴現象としたりなど、反射とその連鎖を優位に置く立場には反対し、むしろ当時の動物心理学者とともに、生物学的な総機能を優位に置いて、この生物学的な総機能が、ユクスキュルによって探究された動物の構成計画、本能、そして意識などのうちに表現されていると考えるのである。ただ、プレスナーのここでの問題点は、そうすることによって本能にかんして以上の基本的な点を指摘するにとどめ、それ以上は積極的に展開しようとせず、また動物の意識にかんしてもその定義とその具体的内実とをそれ以上は積極的に提起しないことにある。

さて次にプレスナーは、動物心理学者のハンス・フォルケルトによって提唱された、動物の知覚意識がそなえている複合質的な構造にかんする理論を検討し、これとの関連で、ゲシュタルト心理学の創始者の一人であるヴォルフガング・ケーラーによって行われた有名なチンパンジーの知能にかんする実験の成果を取り上げる。フォルケルトは、例えばクモにとっては、獲物が網に捕らえられてこれを振動させるという知覚の枠組みに入り込んでこないかぎり、獲物を獲物として知覚しえないことや、ミツバチ、アジサシなどの動物が自らの巣の位置を、特定の環境世界のなかで特定の仕方では方向定位しており、それ以外の仕方では自らの巣を探索することさえ困難になるという実験・観察結果を総括して、次のような自説を展開した。動物の行動はこれを取り巻く状況全体によって束縛されており、このことは動物が、われわれ人間の知覚様式とは根本的に異なって、「所与の複合全体を同時に含む唯一の規定された質にたいする反応」を行うようにと定められていることを意味している、そして、この質のジャンルは、われわれが先立つ章ですでに検討したゲシュタルト質と対比して、全体のなかの諸部分の総和に



は還元されえない「複合質」と名付けられる、と。ここから彼は、動物の知覚世界に含まれる、この複合質に相当する「メロディー」や「形状」が動物の環境世界の特徴であって、われわれ人間の知覚様式とはまったく異なっており、われわれの知覚の場合は、物性の秩序形式に支配されて感覚的な所与性がもろもろの物の核心のまわりに外被として集められ、しかも諸現出のなかで核心から核心へと脈絡が張り巡らされているために、たとえ状況が変化しても物をその物として認識することができる」と主張したのであった。しかし、こうしたフォルケルトの理論は、プレスナーにとっては限定された意義しかもちえないのであって、プレスナーは、動物と人間とのあいだの心的なものという意味での本質的な境界が、ヴォルフガング・ケーラーによる有名な類人猿の知能実験を参照しながらも、さらにいっそう高度に設定されねばならないと考える<sup>(55)</sup>。

プレスナーは、ケーラーのこの実験を方法的に擁護し、類人猿に原初的な知能の働きを認めながらも、その実験結果から彼らと人間との質的相違を彼なりに読み取ろうと努めている。周知のように、ケーラーが第一次世界大戦中にアフリカ西北海岸カナリア群島のテネリファで行ったチンパンジーの知能にかんする実験は、1921年にその再版が一般に入手できるかたちで公表されるや否や、当時の多くの西洋知識人たちの人間観に大きな衝撃を与えたのであった。それは彼らが、デカルト的な精神主義の伝統にしたがい、人間が理性的存在者であり思考する能力を所有するがゆえに、動物界から隔絶した高い地位にあると信じていたからであった。飼育下でしかも実験施設で行われるという大きな限界と時代的制約のなかではあったが、実験の対象となった一群のチンパンジーたちは、程度の差はあれ、迂回路をたどって食物を手に入れることはもとより、紐や棒を用いて食物をたぐり寄せたり、紐と棒をつなぎ合わせたり、いくつかの箱を積み重ねたりなどの道具の使用や、さらには最も能力に秀でたものは2本の中空の棒をつなぎ合わせたりなどの道具の作製までも含む知能的行動を見事になしとげたのであった。プレスナーは、ケーラーとともに、こうした類人猿による課題解決の顕著な成功は彼らの「知的な行動がもつ徴表をすべて示している」<sup>(56)</sup>として、実験結果を正当に評価している。

他方では、ケーラーは成功例のみならず失敗例をも、すなわち、チンパンジーたちが一定の視覚的条件に置かれた時に、例えば2本の中空の棒が平行に置かれた時に、これらをつなぎ合わせるという課題解決に失敗したり、箱や梯子が壁にぴたりと押し付けられた状態にある時、彼らはこれらを道具として認識することができなかったことなどを総括的に考察して、こうした課題解決の失敗の原因が、彼らの視覚が繫縛されていること、彼らに「素朴な重力物理学」しかそなわっていないこと、そして彼らに「静力学」を理解する能力が全面的に欠如している<sup>(57)</sup>ことなどを意味するとし、最終的にはこれらを彼らにそなわる「ゲシュタルトの弱さ」<sup>(58)</sup>へと帰着させた。しかし、プレスナーによれば、チンパンジーの失敗例のうち、とりわけ通路をさえぎっている障害物（箱）のなかに置かれた石を除去してこの通路を通過することができなかったことに注目すべきであって、ここには、彼らが目標物に何かをポジティブに適用する

ことはできても、与えられたものをネガティブに、つまり例えば箱のなかの石を取り除くというかたちで目標を達成することができないという欠陥が象徴的に現れている。それゆえに、「動物界で最も知的な生物、人間に最もよく似た生物に欠けているのは、ネガティブなものにたいする感覚である。ケーラーは、初めから動物の知能に反対して人間と動物との橋渡ししえない本質区別に賛成するというような先入見をいだいてはいなかったのだが、上述のことは彼の探求がもたらした確実な成果である」<sup>(59)</sup>とプレスナーは述べて、フォルケルトの理論をある意味で復権するとともに、ケーラーの解釈を自分なりに修正しようとする。

すでに述べたように、プレスナーによれば、動物には、彼らが周辺領野にたいして取る位置形式の閉鎖性に即応して、原方向としての正対性という特質があり、この正対性とは動物が自らの目標にたいして無媒介に、真っすぐに、じかに向き合っているということを意味していた。このことは同時に、動物有機体が周辺領野のなかの自らの衝動または欲求充足の対象物である目標にポジティブに関係してはいるが、ネガティブに関係してはいないということを意味している。プレスナーは、人間との比較をたえず念頭に置きながら、類人猿に代表されるような高等動物の知覚意識の内部に見られる欠陥の第一は、ネガティブなものにたいする感覚の欠如であると考えている。プレスナーはこう述べている。「動物には、ネガティブなものにたいする感覚は、たとえそれがいかなる形式においてであるにせよ、まだ芽生えてはいない。不在性、欠如、空白——これらは動物からは締め出された直観能力なのである。」<sup>(60)</sup>「動物には、空間と時間のなかの同質的な空虚についてのどんな種類の直観も、与えられていないに違いない。」<sup>(61)</sup>

プレスナーのこうした見解の根拠は、高等動物と人間の知覚様式または直観生活とを比較することによって明らかとなる。プレスナーによれば、人間が真に物を知覚していて、そのものが具体的なかたちで人間に現前しているとすれば、それはこの物が現存しないもの、目にみえないものの、つまりある裏面や隠された側面などの、あるしっかりした秩序に結び付けられて現出しているからにはほかならない。人間の直観像においては、「実的に直観的な事態の向こう側の不可視性にたいするプラス」<sup>(62)</sup>によって、事物が確固とした秩序をそなえた真の事物として現れる。「この秩序は…、つまり空間時間をそなえた核心と外被からなる骨組みは、現象学的な分析が証明したように、感性的な感覚の尺度にとってはまさしく不在者 *das Abwesende* そのものを示している。もろもろの物の対象性または真実性はこうした秩序にもとづいている。」<sup>(63)</sup>これに比べて動物は、いかに高等で知的な場合でさえも、否定性にたいする感覚の欠如のために、直観像のなかに事物が客観性をそなえた対象としては現れることがない。中心的に有機組織化された動物にとっては、おのれの周辺領野のなかの事物は、フォン・ユクスキュル言うところの、感覚運動的な機能環に相互関係した、刺激の出発点であるとともに活動の着手点でもあり、動物の知覚世界のなかの感性的な諸印象の移り変わりや感性的データは事物の「基本トーン」の周りに集まっていて、これらの統一的な基準点となっている。こうした動物

は、フォルケルトが言うように、ただたんに複合質的に秩序づけられた「メロディー」や「図形」を知覚するだけではなくて、個別的で相対的に恒常的な事物を知覚しもあるが、しかし、彼らによって知覚された事物は依然としてこの生物の生体システムに関係しているだけであって、彼らの知覚と行為の圏域から完全に引き離されてはおらず、したがって事物はいまだ対象とも、また事柄ともなっていない、とプレスナーは主張するのである。

ところで、プレスナーによれば、中心的な有機組織をもつ動物にさえも欠落しているのは、否定性の欠如にもとづく対象性や事柄だけではない。プレスナーは「高等動物にとって特徴的であるような、生物と周辺領野との関係のうちでは、主体の側にも領野の側にも欠落したものがあるが、それは、それ自身もはや内容となることのない意識の根拠から際立たせられているという性質である。主体は自己自身にたいして隠されている——主体はおのれの身体だけを所持し、主体的な生命を体験することなく、主体的な生命の空間・時間具有的な中心性のうちに埋没し、この生命から出て純粋な〈対象我〉Mich ではあるが、〈自我〉Ich ではない——し、同様に、おのれの境界のうちの、(外部から観察する者にとっては) 有限であるが、(動物主体にとっては) 境界づけられていない周辺領野もまた隠されている」<sup>(64)</sup>と述べて、こうした動物にはまだ、生命主体と身体の中心性とのあいだに「距離」が形成されておらず、したがって主体が真の主体として成立しておらず、生命自身を体験することがない、と主張する。ここではっきりと分かるのは、プレスナーがドイツ観念論の哲学的な伝統に則って、人間の〈自我〉Ich という視点から、人間と中心的に組織された動物との質的・構造的差異を問題にしているということである。そしてプレスナーに独特な点は、動物がこの段階でもなお衝動生活に依存し、ゲシュタルトが脆弱であり、状況に強く束縛されていて、方向定位をしばしば喪失しやすく、その意味で幻惑されやすいことを、動物の「閉鎖的な形式という位置性の本質評価」だと見なしていることである。そして、プレスナーによって、動物の知覚と行動のさまざまな様式のなかに含まれているもろもろの限界が結局のところ、事物が運動とのみ相関していることに象徴されるような動物の閉鎖的な位置性、そしてこれと直結する正対性というひとつの共通の根源から説明されるのである。

さて、プレスナーによれば、ネガティブなものにたいする感覚の欠如は、動物の知能にたいしても本質的な制限を与えずにはおかない。例えばリンドヴォルスキーは、ケーラーによる知能実験の解釈に異議を唱えて、実験に用いられた補助手段としての棒、梯子、箱などが、実験対象となったチンパンジーたちの過去の樹上生活のなかにあった大枝、小枝などの機能価値に対応するとして、彼らの課題解決が彼らの過去の本能システムに還元されると主張した。プレスナーはこれには断固として反対を表明する。そして、ケーラーとともに、彼が実験したチンパンジーたちには「真の洞察」が見られるとして、これを擁護する。「真の洞察の現れは、例えば犬で比較的容易に確かめられるが、もっと高等な動物になると完全に可能である。」<sup>(65)</sup>しかし、動物に真の洞察が見られるからといって、彼らの洞察と人間の洞察とが本質的にまった

く同一であるというわけではない。人間は周辺領野の実状を決して単純に取り扱うのではなくて、熟慮にもとづいて、事柄に即してこれを客観的に取り扱うことができるという意味において事態を洞察するが、動物はただたんにゲシュタルトだけをとらえたり、あるいは周辺領野の与えられた諸要素の複合を概観することができるだけである。プレスナーはこう総括的に述べている。「動物には、事柄 Sache としての対象の意識がそなわっていないのと同様に、事態 Sachverhalt の意識もまたそなわっていない。動物は領野状況 Feldverhalt（もちろん、これは人間にとっては事態として与えられている）だけを把握する。領野状況とは、周辺領野のなかの眼前にある諸要素のあいだの構造的な諸関係である」<sup>(66)</sup>、と。

俗にしばしば、動物には抽象する能力と概念形成する能力が欠けているとよく言われるが、プレスナーにとっては、こうした主張は当たっているとともに当たってはいない。意識がきわめて未発達な動物の段階でさえ、彼らが「メロディー」や「図形」を直観しうるということは、彼らにゲシュタルト知覚または複合的な質を把握する能力があることを示しているが、このことは同時に、彼らの意識世界がたんなる個別諸知覚の支離滅裂なカオスではなくて、彼らが類似性をとらえる感性的な抽象の働きをもっていることを示す動かぬ証拠である。彼らが知覚する「メロディー」や「図形」でさえも、決して個別的なものかそれとも普遍的なものかという二者択一を許すようなものではないのであって、こうした動物の意識ですらも、個別的なものと普遍的なものとの分かちがたい関係をもっており、動物がもっぱら個別的なものだけを、人間は普遍的なものを認識しうると単純に考える従来の心理学の理論は修正されねばならない、とプレスナーは見なすのである。概念形成にかかわる抽象にかんして言えば、人間の場合この抽象作用は、かつてフッサールが名付けたように、理念観取 Ideation<sup>(67)</sup>という作用にもとづいていて、直観に与えられたたんなる直接的所与を個別性から解き放つ客観化の働きを含んでいる。プレスナーによれば、ある物を例えば「梯子」という概念的な統一にもたらしめためには、前言語的で図式的に直観しうるとともに無数の変異に対応しうる「梯子具有性」があらかじめゲシュタルトまたは枠組みとして存在しなければならない。彼はこう述べて、動物の知能の限界を過大評価しようとする傾向を戒めている。「この枠組みは、はっきりと境界づけられた空虚、輪郭を描かれたネガティブなもの Negativum 以外のものではない。このネガティブなものは——それぞれの図式と同様に——特定のゲシュタルトによって個体的に満たされ、実現される。動物にはネガティブなものにたいする感覚が感性的な直観においてさえも欠けているのだから、動物には理念観取と、したがって概念形成とはそなわっていないのである」<sup>(68)</sup>、と。

しかし、他方では、プレスナーにとって次のことは、動物と人間とを比較した場合の決定的な質的差異である。それは、複合質的な方向定位を行う、外中心化された有機組織をもつ動物にとっては、個別性と普遍性、具体性と抽象性とはたんにゲシュタルトとして未分化に結合しているにすぎず、中心的な有機組織をもつ動物にとっても、彼らの生まれつきの正対傾向によって個別的・具体的なものは、彼らの運動の着手点としてのみ現れる以上、真の個性としては

とらえられてはいないし、普遍性もまたたんなる多くの可能性またはゲシュタルトという意味ではたんなる抽象的な普遍性にすぎない、ということである。プレスナー自身、「だが、真の個性と真の普遍性とが前提しているのは、ネガティブなものそのものを把捉し、或るものの欠如、欠陥、空白を把捉する能力である。したがって、同質的な空間直観と時間直観は、つまり、恒常的な諸要素で充填されることを『要求する』、空白の場所をそなえたうつろな空間とうつろな時間とは、真の客観的な物知覚および真の理念看取的な抽象と本質的に共存している。こうした前提は、ただ人間においてのみ実現されている。人間が初めて、個別的なものと普遍的なもの、概念普遍的なもの、もしくは事柄に即して普遍的なものを識別する」<sup>(69)</sup>と述べているとおりである。

ところで、以上のようなプレスナーの叙述に見られる、人間と動物を質的に区別するメルクマールとしての「否定的なもの」へのこだわりは、かつてシェーラーが「人間であるということとは、この種の現実性にたいして力強い『否』を投げつけるということである」<sup>(70)</sup>と述べ、また「現実存在にたいして常に『然り』を言う…動物と比較すれば、人間は『否と言いうる者』であり、『生の禁欲者』であり、すべてのたんなる現実性にたいする永遠の抗議者である」<sup>(71)</sup>と述べたこととの関連をわれわれに想起させずにはおかない。われわれは、後にプレスナーの哲学的人間学の問題点を総括的に論じる予定であるが、ここで予備的に基本的な点だけを言及しておけば、ケーラーの実験結果のうち、彼がゲシュタルトの弱さに帰着させ、プレスナーがこれを「否定性」にたいする感覚の欠如と解釈し直している主張の根拠となったものは、梯子が壁にぴたりと押し付けられて置かれた場合、チンパンジーたちが梯子を梯子として認識できなかったという一例と、通路を妨げている踏み台のなかに石を入れて置くと、彼らがこの石を取り除いて通路を空けるという課題の解決ができなかったという一例だけであることが考慮されなくてはならないであろう。つまり、人間と動物の本質的差異にかかわる重大な結論を導出するための根拠としては、たった二例だけでは不足に過ぎると思われる。さらに、これらの実験結果が真実であるための評価基準として、これらがそのほかの時点と状況下でも、そのほかの個体群においても追試可能だという条件を満たさなければならぬし、これらの実験が、彼らが日常生活を行っている自由な野外の空間ではなくて、飼育下の実験室内というきわめて大きな制約条件のもとに行われているという事実も、考慮のうちに入れなければならないであろう。われわれには、方法論と評価基準を明確にすることなく、動物の内部世界を人間とは異なった仕方でありありと描いて、「否定性」にたいする感覚の欠如を断定するプレスナーのこうした叙述のうちに、シェーラーと同様に、知覚世界における動物と人間との質的断絶という先入見がはたして本当に存在しなかったかどうか、いささか疑問に思われるのである。

## (6) 記憶と歴史的な反応基盤

さて、プレスナーが次に問題にするのは、動物の記憶と学習にかかわる能力である。これは、



中心的に有機組織化された比較的高等な動物にそなわった連合の能力であり、すなわち反復して体験を行ううちに知覚に与えられたデータどうしを関連づけて記憶することによって周辺領野にたいして効率的に反応し、機能的に適応する能力にほかならない。もちろん、この連合または学習能力のなかには、特定の刺激に対する反応または行為が不成功に終わった場合に、当初の反応または行為を修正する能力が含まれており、これがすでに検討した知能という能力の大きな部分を構成する。プレスナーはこうした比較的高等な動物の連合・学習・行為の修正にかかわるもろもろの能力を「記憶」Gedächtnis という概念に集約している。われわれがすでに検討した知能は、洞察にもとづいて行為を遂行し、そのことの記憶をつうじて経験を行う能力のことであったが、知能の一部としてのこうした記憶、すなわち連合・学習・行為の修正の能力を検討するさいに、プレスナーはやや曖昧さの残る「経験」という概念を使用するのを避けて、ドリーシュが定式化した「歴史的反応基盤」die historische Reaktionsbasis という耳慣れない概念を採用する。

ドリーシュはすでに、1921年の彼の主著『有機的なものの哲学』のなかで、動物の本能に次ぐ行為の能力を論じたさいに、行為を一般的に定義して「『行為』とは以下のようなそれぞれの動物の運動である。その運動とは、この運動の特殊性がただたんに…アクチュアルな刺激の特殊性に結びついているだけではなくて、過去のあらゆる刺激とそれらの効果との特殊性に結びついているほど、運動の実行者の個体的な生活史に依存しているような運動である」<sup>(72)</sup>と述べて、行為であるかどうかを見る最初の基準として「歴史的反応基盤」をあげた。ドリーシュによれば、「われわれはこう言うことができる。有機体のそれぞれの行為の特殊性は、過去において有機体と遭遇した、感覚と運動に関係するすべての刺激に依存しており、これらの刺激のすべての特殊な効果に依存している、と。われわれは、振る舞いが有機体の『個体的な歴史』に依存していると述べたときに、こうした特徴をすでに簡単に記述しようと試みた。そして、われわれは今度は、歴史的反応基盤が、それぞれの行為の特種なものが依存している主要構成分の反応基盤であると述べることによって、こうした特徴に専門的な名称を与えるであろう。」<sup>(73)</sup>

われわれにとっては、ドリーシュが自ら名付けたこの「歴史的反応基盤」を説明するさいに、彼自身がこれと、特定の音を過去のものとして記録し、蓄音機を用いてこの過去が特定の再生音として再生される録音盤（レコード）とを比較していることが興味を引く。つまり、一定の発展段階の動物が個体的な生活史のなかで獲得した体験は、その動物の記憶のうちにしまい込まれるが、この動物は後に出会うさまざまな機会にこの体験を記憶から呼び覚まし、そうすることによって以前の反応を修正して新しい事態に対処することができ、そのことを反復することによってまた新しい個体の生活史がつくられていく。そのようにして、記憶のなかに保存された体験はたんなる要素と化し、必要に応じて呼び覚まされて新しい状況と結び付けられていく。動物は刺激と反応の配分（組み合わせ）を行動図式としてもち、そうすることによって自

らの環境世界を形成するが、この刺激と反応の配分（組み合わせ）は、記憶と再生というプロセスのなかで新しく組み替えられるという可変性をもつ。その点で、この動物は、たんに過去の音を録音されているとおりにそのまま器械的に再生するだけの録音盤とは大いに異なっており、状況と諸要素、そして刺激と反応の組み合わせの可変性と柔軟さという利点をもっている。プレスナーが言いたいのは、こうした体験と記憶をそのうちに織り込んだ再生と新たな結合というあり方は、動物に特有であり、閉鎖的な形式という彼らの本質にもとづいているということであり、この一点でのみプレスナーはドリーシュと意見を異にしている。

したがって、ドリーシュが言う「歴史的反応基盤」とは、「歴史的」や「基盤」の概念が指示する内容が必ずしも理解容易だというわけではないにしても、動物有機体が周辺領野にたいして取り結ぶ関係のうちでも、外中心的に有機組織化された動物の場合の刺激と反応との運動優位の連結、さらに中心的に有機組織化された動物の場合の刺激と反応の知覚優位の本能的な連結を超えて、動物主体が学習し経験した過去によって、この動物にそなわる連合の能力にもとづいて、現在の反応を修正することができるという、知能的な能力と結びついた、環境要因にたいするいっそう高度の反応を意味するであろう。

さて、プレスナーはドリーシュのこうした動物学的発想と用語法を継承しながらも、あくまでも位置性にかんする自らの理論という視角からこれを解釈し直し、そのうえで動物の記憶・学習・連合の働きを位置づけようとする。プレスナーによれば、「生きたものはすべて、動物であろうと植物であろうと、一般に——それ自体として未来の様相をつうじて、すなわち還流的 rückläufig に媒介された仕方——おのれの過去である」<sup>(74)</sup>し、「未来、過去、現在という諸様相にしたがって三部分をなして分枝化された時間を実現するということは、おのれの先行構造 Vorwegstruktur, 先取り構造 Vorgriffsstruktur によって還流的におのれの過去として存在するということであり、植物的に有機組織化されていようと、動物的に有機組織化されていようと、生命という種には特有なことである。」<sup>(75)</sup> プレスナーの叙述に特徴的なことは、学習・記憶・連合の能力が問題になるこのところで、時間性の問題、とりわけ動物の時間具存性の問題が議論の俎上に乗せられるということであり、この点でわれわれは、一見したところ、奇異の念を起こさずにはおかないであろう。

こうした難解な叙述を私なりにできるだけ分かりやすくまとめると、プレスナーの主張は次のように要約されよう。つまり、生きたものは、生命をもたない無機物とは異なって、過去・現在・未来という時間的様相のなかで生を営んでいる。植物も動物も、こうした生きたものとして、何らかのかたちで、大なり小なりの程度に、未来に基づき、未来を先取りしながら、つまりおのれに先行的に、生きている。時間性の形式のうちにある生きたものは、現在から未来、未来から現在へと還流したり、現在から過去、過去から現在へとというように還流しながら、その生命活動を行っている。過去という様相から見れば、生きたものはおのれの現在のうちに過去を所持し、おのれの「背後に」既存在 Gewesensein を保存している。現在という様相

から見れば、〈今〉は「やってくること」と「過ぎ行くこと」との、結合し分離する〈あいだ〉Zwischenにはかならない。しかし、開放的な形式をもつ有機組織としての植物と閉鎖的な形式をもつ有機組織としての動物とは、「植物もまた、たんに間接的な仕方ではあるが、おのれの固有の過去である。だが、開放的な形式である植物には、植物がおのれのうちに保存している過ぎ去ったものと関係する可能性は少しも残されてはいない」<sup>(76)</sup>という点で、決定的な相違がある。固有の身体と周辺領野を所持し、身体諸器官を中枢神経系で結合している動物は、その閉鎖性のゆえに、おのれに再帰的に還帰し、おのれにたいするこうした再帰の関係のうちで自分自身を体験するがゆえに、おのれの過去にたいする関係をも所持する。つまり、動物だけがおのれの過去にたいして真に関係し、過去を体験し、過去にたいして距離を取り、過去の記憶にもとづいて現在を修正することができる。

問題のこの局面においてもプレスナーの主たる関心事は、動物のこうした学習・記憶・連合、そして修復の能力そのものの生物学的意味やこれら相互の内的関連にあるのではなく、ここでもまたもやこれらの諸能力の根源的由来と位置性とのかわりにある。つまり、生きた存在である動物は、閉鎖的な形式と正対性という位置性を所持するがゆえに、過去にたいする再帰的关系のうちで、自分自身にたいして現在の gegenwärtig である。この動物にとって〈今〉は、これから出来るものと過ぎ去ったものとの〈あいだ〉にはかならず、しかも「空白」または「空隙」としての〈あいだ〉にはかならない。この「空白」または「空隙」としての〈あいだ〉が動物に存在するからこそ、後方には過去が、そして前方には未来が広がる「峠」Paßhöheのように、まさにこここのところで過ぎ去った過去が現在に媒介される。プレスナーは、この問題局面における植物と動物の区別に関連して、「動物にあてはまるのは、過ぎ去ったものが『空隙によって』 per Hiatus という媒介性の形式のうちにあり、すなわち動物にとって現前的である」<sup>(77)</sup>と述べて、「個体が遂行しうるか、または遂行している可能的で現実的な運動の過剰 ein Überschuß をなお空けたままにしておく」この過去と空隙の存在によって、この動物には過去が修復可能であること、そして「歴史的反応基盤」の修復可能性がそのように初めて「ア・プリオリに把握される」とする。そして、こうした「歴史的反応基盤」のゲシュタルト化は、知覚領野のゲシュタルト化と同様に、中枢的な機構の濾過機能に依存しており、そのなかの種特有の諸要素の結合は、その次の新しい結合を生みだすための素材となる。われわれにとっては、動物の学習・記憶・連合、そして修復の能力を問題にしているプレスナーの努力は、これらの本来の生物学的意味の解明を離れて、もっぱら生命あるものの位置性という自らの問題関心だけに限局されて、過去・現在・未来という時間的な様相から〈あいだ〉または「空隙」という空間的イメージを描き出すことだけに腐心しているように見える。

さて、以上のような叙述の過程をへて、プレスナーは記憶を「残滓 Residuum と予期 Antizipation との統一」<sup>(78)</sup>として規定する。それというのも、中心的に有機組織化された動物は、おのれのうちに体験を記憶として保存することでこれを要素とするが、ある意味ではこれは具体的で

ありありとした記憶の残り物、すなわち「残滓」でもある。しかし、プレスナーは「生きた存在は、出来し、おのれの基づけ Fundierung の基盤が未来のなかにあり、未来にもとづいて、『先取り』しながら生きるかぎりにおいて、現在的である」<sup>(79)</sup>と述べてもいるから、動物がいまだに体験したことのない新しい事態にたいしても「残滓」としての過去の記憶を手掛かりに行動せざるをえず、未来を予期するさいにこうした「残滓」が役立てられて、刺激と反応の新たな組み替えが可能になるという意味においては、記憶はやはり「残滓と予期との統一」なのである。「生物が出会っているものを記憶のなかへ沈殿させることが、この生物の未来性を經由してのみ、すなわち、この生物の先行存在によって媒介されてのみ行われるのだとすれば、つまり、体験されたものをその諸要素へと解体することが、こうした（内的な休止という）回り道にもとづいているとすれば、歴史的な反応基盤の諸内容には、先行性格が無媒介に、すなわちこの基盤の形式として、現存していなければならない。記憶のなかに受け入れられるものとそうでないものは、この形式に依存しており、この形式が、内的な入れ替え可能性、記憶の生命性を可能にしているのであって、この記憶は、…諸要素を編成し直すことで過ぎ去ったものから学習することを有機体に認めることによって、この活動の余地を拡大している」<sup>(80)</sup>とされるゆえんである。

#### (7) 動物の位置性にかんするプレスナーの理論の評価のために

これまでやや詳しく述べてきたように、生きたものの位置性にかんするプレスナーの理論は、一方では植物が栄養環境にたいして自らを開放しているのにたいして動物がこれとは反対に自らの栄養環境にたいしては閉鎖的にふるまうというドリーシュの叙述<sup>(81)</sup>から大きなヒントを得るとともに、これとフォン・ユクスキュルによって展開され、当時の知識人にきわめて大きなインパクトを与えたいわゆる「環境世界」の理論とを結合させながら、無機物と有機体、つまり植物、動物、人間によって構成される世界の本質的区別を行おうとするものであった。そして、有機体が自らを取り巻く周囲の環境にたいしてどのような位置的な関係をとるのかという一貫した観点から、有機体相互の本質的特徴と差異とを考察し、これを最終的に他の有機体とは本質的に異なる独自のメルクマールを提示しうる哲学的人間学の体系へと総合したのであった。プレスナーは同時に、この困難な作業をなしとげるにあたって、フッサールによって開始された現象学的な発想と考察方法を動物と人間の知覚世界または内部世界に適用するとともに、動物と人間の振る舞いと行為とを解釈学的手法によって了解するという手法によってこれを補完し、さらに当時の感覚生理学、ゲシュタルト心理学、動物心理学、動物行動学、比較心理学などの最新の諸成果に広く学びながら、有機的なものの世界の諸段階のそれぞれの本質的特徴を明らかにしようとしたのである。そのことを評価したうえで、そしてプレスナーの哲学的人間学の全体にかんする最終的な評価にかんしては、本論考の最終章である第7章において本格的に展開する予定であるが、動物の位置性とその本質的諸特徴を議論の中心的な対象に

据えた本章の叙述にかかわるかぎりで、私なりになおプレスナーの哲学的人間学の問題点として残ると思われるいくつかの事項を以下にまとめることにしたい。

- 1) すでに若干触れたように、プレスナーは動物有機体を、意識を遮断し、外中心的に有機組織化された動物と、意識を機能的に強化し、中心的に有機組織化された動物とに大きく区分したうえで、前者にもっぱら外界からの刺激にたいする反射的な反応を、後者には知覚優位の刺激と反応の配列（組み合わせ）、周辺領野の複合質的および物的な分枝化、さらには本能・経験・知能・記憶というような意識機能の発達を見て、これと人間の、根源的には位置性に由来する差異を論じようとする。そのさい、プレスナーの叙述は、内部世界の先入見なき記述という現象学的な手法にしたがい、領野、核心、中間項などの独特な用語を駆使しながら展開されるのであるが、こうした問題局面においてプレスナーの叙述が精緻をきわめればきわめるほど、われわれにはあるひとつの方法的な疑問が湧き起こってこずにはおかない。それは、人間の知覚世界の描写には現象学的に思索しつつある人間とその共通感覚という保証があり、この保証はさらに共通の言語によって伝達され、そうすることによっていずれはその真偽が確証されることになろうが、動物の内部世界をかくもリアルに現象学的に叙述するためには、そしてこの叙述が科学として実証されるためにはいかなる諸条件が必要なのか、という問いである。つまり、われわれはそもそもどのようにして、またはいかなる方法をもって動物の内部世界に入り込むことができるのか、そしてどのようにして動物の内部世界を科学的・実証的に描写することが可能なかが方法論的な疑問として残るのである。もしもこうした問いに答えることができないとすれば、いかに位置形式の点で、とりわけ正対性によって動物と人間の周辺領野へのかかわりかたと知覚領域が異なると叙述したところで、こうしたやり方は人間の知覚世界をモデルにしたうえで、これよりも次元的に劣ると推測される知覚世界の像を先入見として動物に押し付けるか、または動物の知覚世界なるものをたんに擬人的に、人間世界の側からのみ投影しているのではないかというそしりを受ける可能性を完全に免れることができないであろう。
- 2) プレスナーは、「経験を可能にする条件」を経験科学によっては解明されないア・プリオリなものとして位置づけ、動物にかかわる領域では、例えば動物が閉鎖的な形式と正対性という位置性を所持するがゆえに、動物にとって〈今〉はこれから出来るものと過ぎ去ったものとの〈あいだ〉にほかならず、しかも「空白」または「空隙」としての〈あいだ〉にほかならないと述べている。この「空白」または「空隙」としての〈あいだ〉が現実存在するとすれば、そのことはいかにして実証され、どのような方法的な手続きによって確認されるのであろうか。このことの方法論的な証明が存在しないかぎり、プレスナーのやり方は、考察の対象を現実的に分析するというよりは、またしても考察の対象におのれを思想的に押し付けるという結果を生んでいるのではないかという疑問を完全に払拭することができないであろう。プレスナーが言う植物の開放性と動物の閉鎖性とはた



しかに妥当な主張であると思われるが、しかしそれらは、それぞれの有機体が自らの栄養環境にたいしてどういう位置にあるかという観点から、経験的に導出され、その妥当性を経験的に確認されるのであって、動物の「空隙」「空白」を初めとする諸概念はこれとは共通の性格を有するとは言い難いであろう。こうした疑問は、たんに動物の領域だけでなく、プレスナーが析出するすべてのア・プリオリ的なものに、したがって次回に考察する人間の脱中心的な位置形式または脱中心性というプレスナー人間学の中心概念にさえも、たえずつきまとっているように思われる。

- 3) プレスナーによれば、「どの動物も…固有の身体と見知らぬ内容とがあたえられているひとつの中心である。動物は、肉体的に見れば、自分にたいして現在の、おのれから際立たせられたある周辺視野のなかに、いいかえれば対向という関係のなかに生きている」<sup>(82)</sup>とされて、このことを根拠として、彼はどの動物も意識的 *bewußt* であり、自発的に反応し、行為すると理解しているのだが、ここでの問題はどの動物にもそなわっているとされる「意識」概念が定義されないままに用いられていることであろう。もちろん、当時においてもなお、動物と人間の身体を自動的な機械的機構と見なし、これを主導する「精神」または思考する「理性」の働きと言語を所有するかどうかを動物と人間とを隔てる決定的な本質的な徴表と考えるデカルト主義は根強く存在していたであろう。そうした精神的状況のなかで、どんな動物も動物であるかぎり、意識し、行為するというプレスナーの主張は、きわめてラディカルなものであったであろう。しかし、この主張の先見性を評価しながらも、この主張にたいする反論の余地を残さないために、「意識」という概念の内容を明確に定義付ける必要があったのではないであろうか。
- 4) すでに引用したように、「動物が動物自身であるかぎり、動物は〈ここー今〉のなかに埋没している。この〈ここー今〉は動物にとって対象的になっておらず、動物から際立っているわけでもない」<sup>(83)</sup>というプレスナーの叙述は、他の箇所で行われている「生きた存在は、出来し、おのれの基づけの基盤が未来のうちにあり、未来にもとづいて、『先取りしながら』生きるかぎりにおいて、現在のである」<sup>(84)</sup>という叙述とは、もしも論理的に矛盾していないとすれば、いかに内的に関係しているのであろうか。後者の叙述のように、たとえ程度の差はあっても、動物がなんらかのかたちで未来と関係して生きているのだとすれば、この動物は少なくとも完全に〈ここー今〉のなかに埋没しているとは形容しえないであろう。ある種の動物が季節の到来に応じて長距離を渡って移動したり、森林に住み冬眠をしないある種の動物が冬にそなえて食物を貯蔵する行動を行っている場合、たとえ彼らの行動の多くの部分がいわゆる本能によって規定されているとしても、このことは、彼らが何らかの程度に〈ここー今〉という現在の状況圧から身を引き離していることの証拠だと考える方が論理的ではないのか。
- 5) プレスナーは、ケーラーによるチンパンジーの知能実験のもつ意義を擁護しながらも、

ケーラーが彼らのうちでも最も課題解決にすぐれた能力を示す者ですらも特有の限界を示したことをもって、彼らのゲシュタルトの弱さに由来すると解釈した点に意義を唱え、このことがゲシュタルトの弱さというよりも、彼らの意識がもつ特徴的な質的欠陥のためだと理解し、すでに引用したように、「動物界で最も知的な動物、人間に最もよく似た生物に欠けているのは、ネガティブなものにたいする感覚である」と述べ、また「不在性、欠如、空白——これらは動物からは閉め出された直観能力なのである」と述べたが、このことの根拠と証明手続きにかかわる問題もあげられよう。プレスナーが自説の証明のためにあげている論拠は、ケーラーの実験結果の報告のなかに見られる、道を塞いでいる箱のなかに重い石が入っていて、この石を取り除くことによって道を開けるという課題の場面になると、チンパンジーのうちで最も能力に優れたものでさえも、課題解決に失敗したという事例ただひとつである。実験が飼育下でしかも実験施設内で行われたというきわめて重大な制約条件を度外視するとしても、たったひとつの失敗という一例だけの分析から、動物と人間との本質的差異という重大な結論を導出するとすれば、そのことはやや危険に過ぎはしないであろうか。

6) 動物と人間とを本質的に分かつとされる「否定的なものにたいする感覚の欠如」とは、プレスナーがシェーラーと共有する重要な論点である。しかし、例えば空港内で麻薬や覚醒剤の探知のために活躍している警察犬がいくつものトランクの匂いを嗅いで通り過ぎ、あるトランクの前で突然立ち止まって鳴いて禁止されている薬物の所在を知らせる場合、彼らがいくつものトランクについて禁止薬物の匂いがしないという「無」の感覚をもっていないとするのは、きわめて論理性を欠いていることになるであろう。また寒い冬に檻のなかに閉じ込められるのを嫌い、鳴き声をあげれば家の中に入れてもらえることを学習した私の愛犬が、鳴き声をあげても自らの欲求を満たすことができずに癩癪を起こし、金網を食い破ってでも外に脱出することを繰り返す場合、私にはこの犬がどうしても「おのれの現実性に対して力強い『否』を発している」としか思えないのであるが、いかがであろうか。

7) プレスナーは、自らの学問的生涯と経歴を生物学から開始して哲学に転向した研究者として、ドリーシュ、フォン・ユクスキュル、ケーラー、ボイテンデイクなどの当時の最新の生物学・生理学・行動研究・心理学の成果を広く踏まえながら、これを生命あるものの位置性にかんする自説の展開に適用したにせよ、やはり20世紀初頭の科学の到達段階という当時の時代的制約によって拘束されるのを免れることができなかった。例えば、人間の「胎児化仮説」を唱えて、ダーウィンの進化論に対するアンチテーゼを展開したオランダの解剖学者ルイス・ボルクの学説は、シェーラーを初めとする哲学的人間学の成立と展開にも大きなインパクトと足かせとを与えていた。しかし、当時の西欧知識人の人間観・動物観を揺るがせたケーラーの実験でさえも、チンパンジーたちを人工的に飼育したうえで

実験施設という限られた空間のなかで行われたものでしかなかったことは明らかである。周知のように、野生状態における類人猿の行動はとりわけ第二次世界大戦後急速に進み、飼育下ではとうてい発見できなかった彼らの個性的であるとともに社会的・文化的な行動、彼らに特有の社会構造が次々と明らかにされているだけでなく、チンパンジーやピグミーチンパンジーに言葉、手話、図形文字によるコミュニケーションを学習させる研究が進み、また彼らによるものの形、複合図形、色彩、数、記憶などの認知科学的研究も大いに推進されて、これをヒトとの比較認知心理学へと発展させようとする試みが展開されつつあるし、彼らの出産と育児の観察にもとづく発達心理学的な研究も成果をあげつつある。他方では、ヒトを含む霊長類化石の発掘と分析にもとづく霊長類進化学・自然人類学の研究成果と、DNA解析と分子進化を武器とする分子生物学の急速な発展とが次第にそのあいだの距離を埋めつつある<sup>(85)</sup>。これらの最新の研究成果が一樣に示しているのは、大型類人猿とヒトとのあいだの生物学的・心理学的な差異が、20世紀初頭にはとうてい考えられなかったほど、小さいものだということである。これらの諸科学の最新の成果に照らすならば、プレスナーが動物の位置性にかんする論究のなかで提示した主要な論点のうちでも、とりわけ動物と人間の本質的差異として提示された多くの規定にかんしては、脱中心性という人間の本質的特徴を表す位置性という彼の人間学の中核となる原理をも含めて、その屋台骨を大きく動揺させられているということは、紛れもない事実であろう。

8) プレスナーの主要な問題意識は、フォン・ユクスキュルの環境世界理論やケーラーの類人猿の知能実験、さらには文化の起源にいたるまで、さまざまな動物学的・人間学的諸問題を一貫して「位置性」という彼の理論全体の要諦から解釈し直して、その意味を読み替えるところにあるのだが、そのさいにプレスナーのやり方は、いたるところに位置性の原理とこれにもとづく生物学的な現れを確認するということで終始しているために、一種の還元主義という危険に陥っているという印象を与えてはいないであろうか。われわれは、例えばプレスナーが、対象の認知という認知科学的な問題局面、そして文化の起源という文化学的・文化人類学的問題局面を取り上げる場合、これらの問題レベルの差異と問題レベルがもつ固有の論理とを踏まえることなく、これらを一樣に位置性とその差異だけから説明することに終始しているのを見るにつけ、問題の個別的な解明が深化されずに、位置性にかんする自説の展開または追認で終わってしまっているのではないかという印象を拭い去ることはできないのである。

9) プレスナーが動物を対象として考察する場合、もちろん進化論の視点を欠落していたのだが、そのこととも関連して、もっぱら動物を個体として考察するだけで、まして個体群や群として考察していないという点も、ひとつの特徴点としてあげられよう。このことは、例えば彼が動物の知能・記憶・学習を論じた後に、さらにドリーシュから継承したきわめて難解な「歴史的反応基盤」を取り上げるところで明らかになるといえよう。それという

のも、ここで言う「歴史的」とはもっぱら動物の個体史を念頭に置いて言われているからである。本来類的存在であるはずの社会性動物や人間を類的存在から切り離して、その知覚世界や発達をもっぱら個体としてのみ取り扱うというのは、いわば「ロビンソン・モデル」にはかならず、ゲーレンを含めた哲学的人間学の代表的な研究者に強く見られるひとつの共通の傾向性であるが、生物学出身のプレスナーでさえもその例外ではなかったように思われる。こうした点では、哲学的人間学の提唱者であるマックス・シェーラーの方が事態の真相を正確に洞察していたといえよう。なぜかといえば、シェーラーは、動物の連合的な記憶の能力にもとづく学習や模倣についてこう述べているからである。「『模倣』と『模写』はあの反復衝動が特殊化されたものであるにすぎない。…『伝統』という重要な事実は、両方の現出〔連合と模倣〕が結合することによって初めて形成される。それは、動物の行動が同種の仲間の生活の過去によって規定されるというまったく新しい次元を、生物学的な『遺伝』に付け加える」<sup>(86)</sup>、と。動物の生活における伝統の存在、そしてそれが同種の仲間の生活の過去によって規定されるという重要な事実こそ、プレスナーの「歴史的反応基盤」の概念内容のうちに取り入れられるべきものであったように思われる。

- 10) 次の章とも深く関連することをここで予備的に述べておけば、プレスナーは、閉鎖的な位置形式をもつ動物が中心的に有機組織化されているがゆえに、彼らが例えば物理的な空間・時間、すなわち〈ここー今〉のうちに埋没してこれを真に対象化しえず、彼らの知覚世界に現れる事物を真の対象としては認知しえず、自己は所有してはするものの、真の自我はまだ登場していないとし、これに人間の脱中心的な位置形式を対置して、人間が〈ここー今〉から身を引き離して「距離」をとりうるがゆえに、真の対象化と即物化、真の自我、「消失点」があることを結論とする。プレスナーは位置性という彼の理論的な根幹にふさわしく、できるかぎり空間的なイメージを作り上げることにのみ腐心しているように思われる。しかし、私には、プレスナーの言うように動物と人間とのこうした顕著な差異が存在することをたとえ容認するとしても、こうした差異なるものが、決してプレスナーの言うような位置性の本質的な差異というようなものではなくて、人類が生物学的進化のスパンから見ればたかが数百万年というごく短期間に3倍もの急激な大脳化をとげたその活動と産物によるものであり、とりわけ判断力・推理力を含む大脳の意識的な活動の大きな差異にあると考えることはできない、あるいはそう考えてはならないということの根拠はいったいどこにあるのか、という疑問を抑えることはできないのである。

これらの疑問にたいする答えのいくつかは、本論文が次章で取り上げる「人間の領域」にかんするプレスナーの人間学の中心思想をさまざまな角度から検討する過程のなかで、次第に明らかにされるであろう。(次号へと続く)

2002年9月20日

- 注 (1) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Plessner Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S. 291~292
- (2) Ibid., S. 292
- (3) Ibid., S. 295
- (4) 例えば, 「核心 Kern」がフッサールによってその著『イデーン』などで用いられている用語であることについては, 本論文の先立つ(2)第二章の注(38)を参照されたい(奥谷浩一「プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(2)」, 『札幌学院大学人文学会紀要』第68号, 2000年9月, 69頁)。
- (5) フッサールにおいては, われわれの身体 Leib は, 客観空間の内部に物体 Körper (物 Ding とは区別される) として存在するとともに, 知覚と感覚の世界の担い手としてわれわれの主観にぞくするという二重の性格を有するものであるが, その場合, 身体を物的な側面から見たものが身体物体 Leibkörper とされた。この語法を継承したのがマックス・シェーラーであって, 彼においても, われわれ人間には身体にかんして外的意識とともに内的意識がそなわっており, 身体物体としての自己の身体にかんする知覚と身体の状態にかんする内的意識とは直接に統一されていて, しかもこの統一は経験と学習によってではなく, 根源的にわれわれに与えられたものだと言われる。例えば次の叙述を参考にされたい。「ここでまったく理解されないままに残される最初のもは次のような疑いえない事態である。それは, 各人が現存在『にかんして』および身体——しかも, まず固有の身体——の『性状』にかんしてもっているあの内的意識と, 彼の身体(身体物体 Leibkörper)の外部知覚とのあいだには, 例えば視覚と触覚をつうじて, ある厳密で直接的な同一性統一が存立するという事態である。」(Max Scheler, Der Formalismus in Ethik und die materiale Wertethik, Scheler Gesammelte Werke, Band 2, Francke Verlag, S. 31)
- (6) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 296
- (7) Ibid., S. 298
- (8) Ibid., S. 299
- (9) Ibid., S. 300
- (10) Ibid., S. 300
- (11) Ibid., S. 301
- (12) Ibid., S. 302
- (13) Ibid., S. 299
- (14) Ibid., S. 304
- (15) Ibid., S. 304
- (16) Ibid., S. 306
- (17) Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, Scheler Gesammelte Werke, Band 9, S. 31
- (18) Ibid., S. 34. シェーラーは『宇宙における人間の地位』なかの先立つ箇所, 植物は心的なものをもっていると述べ, 「生物は…自分自身に気づいている sich selber inne werden ことによって, 対自存在および内的存在 ein Fürsich und Innesein を所有しもするという事実」に言及しているから, ここで引用した箇所の「動物は自己 sich を所有していない」という叙述は, 私には自己矛盾しているように思われる。哲学的人間学の思想諸潮流においては, プレスナーも含めて一般に, 自分, 自己, 自我, 意識, 自己意識, 精神などの関連しあう諸カテゴリーにかんする明確な定義がなされず, それぞれがきわめて多義的なままに用いられているという印象を拭い去ることはできない。
- (19) Vgl., Arnold Gehlen, Der Mensch. Seine Natur und seine Stellung in der Welt, 12 Aufl., Akademische Verlagsgesellschaft Athenaion, 1978, S. 53ff
- (20) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 308
- (21) Ibid., S. 311
- (22) Ibid., S. 337
- (23) Ibid., S. 304
- (24) Ibid., S. 305
- (25) Ibid., S. 305
- (26) Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, ibid., S. 42
- (27) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 306



- (28) Ibid., S. 307
- (29) Ibid., S. 310
- (30) Ibid., S. 307
- (31) Ibid., S. 312
- (32) Jakob von Uexküll, *Umwelt und Innenwelt der Tiere*, Verlag von Julius Springer, 1921, S. 46. 同じヤーコプ・フォン・ユクスキュルのそのほかの箇所でも叙述されている次の言葉をも参照されたい。「生物学とは生きたものの有機組織にかんする学説である。有機組織という概念で理解されているのは、さまざまな種類の諸要素が統一的な計画にしたがって共同の作用へと結び付けられているということである。」(Jakob von Uexküll, *ibid.*, S. 25) 「もろもろの計画がないとすれば、すなわちすべてを支配している自然の秩序諸条件がないとすれば、秩序だった自然は存在せず、カオスだけが存在することになる。…ところで生きた自然諸計画は、環境世界を研究するさいに最も明瞭に表現される。」(Jakob von Uexküll, *Streifzüge durch die Umwelt von Tieren und Menschen*, Fischer Taschenbuchverlag, 1970, S. 56) 「すべての計画はひとつの圧倒的に大きな計画適合性にぞくするが、これは今まで否定しようという努力がなされてきたものである。それは、きわめて安易であったが、しかし今日ではもはや許されはしないことである。」(Jakob von Uexküll, *Theoretische Biologie*, Suhrkamp, S. 342)
- (33) フォン・ユクスキュルの「構成諸計画 Baupläne」という考え方は、例えばアドルフ・ポルトマンの人間論に継承されているであろう。「地上の生命が自然という秩序に従っている」「あらゆる生命研究がいやというほど多くの事実を伝えているように、この秩序づけられている生命現象をも見極めることは、そのうえになおいっそう大きな秩序が存在することを予感しないわけにはいなくなる」(Adolf Portmann, *Biologische Fragmente zu einer Lehre von Menschen*, Verlag Benno Schwabe & Co., S. 165) ただし、ポルトマンは、シェーラーおよびゲーレンとともに、人間を動物の一種と見なして人間の環境世界をも研究しようとしたフォン・ユクスキュルの、生物学者としては当然とも思えるこうした見解に反対している (Vgl. Adolf Portmann, *Vorwort von Jakob von Uexküll, Streifzüge durch die Umwelt von Tieren und Menschen*, S. XIII ff)。
- (34) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, S. 315
- (35) Ibid., S. 314
- (36) Ibid., S. 314
- (37) Ibid., S. 315
- (38) Ibid., S. 317
- (39) Ibid., S. 318
- (40) Ibid., S. 320
- (41) Ibid., S. 321
- (42) Ibid., S. 323～324
- (43) Ibid., S. 324
- (44) シェーラーは、人類進化のひとつの鍵を握っていると思われる大脳化にまったく言及しないわけではない。しかし、動物と人間の本質的差異を、生命世界を超えたところに位置する「精神」に求める彼にとっては、大脳化にかんする問題は問題として意識されてはいない。
- (45) Arnold Gehlen, *Der Mensch. Seine Natur und seine Stellung in der Welt*, *ibid.*, S. 70. ゲーレンは、人間の生物学的「欠陥」に熱心に言及し、その生物学的「代償」を問題とするのだが、きわめて不思議なことに、人間の顕著な大脳化についてはほとんど度外視し、「代償」としてさえもほとんど問題にすることはしない。
- (46) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, S. 324
- (47) Ibid., S. 326
- (48) Ibid., S. 330
- (49) Ibid., S. 330
- (50) Ibid., S. 331
- (51) Ibid., S. 318
- (52) Vgl., Max Scheler, *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, *ibid.*, S. 20ff. シェーラーは、当時の生物学の達成を踏まえながら、総合的視点に立って、生命世界において心的なものがもつ諸能力のそれぞれの

諸段階, すなわち感受衝迫, 本能, 習慣的行動, 連合的記憶, 実践的知能などの内的・論理的関連をとらえようと努力していることは評価に値する。しかし, こうした努力が真に成功するのは生物どうしの系統発生的連関, すなわち進化論の立場に立って初めて可能だったであろう。

- (53) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, S. 324
- (54) Ibid., S. 332
- (55) Vgl., ibid., S. 337
- (56) Ibid., S. 338
- (57) Wolfgang Köhler, Intelligenzprüfungen an Menschenaffen, Springer-Verlag, 1963 (1921), S. 106~107
- (58) Ibid., S. 163
- (59) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 340. しかし, われわれにとって気になるのは, プレスナーがこの引用文中でチンパンジーを「動物界で最も知的な生物, 人間に最もよく似た生物」として, 人間を動物界から除外しているという印象をわれわれに与えていることである。なお, さらに付け加えるならば, ここでプレスナーはケーラーの実験に高い評価を与えているにもかかわらず, 後になって1946年に発表した論文「人間と動物」のなかでは, ケーラーが知性という観点から動物と人間を比較したことは, 動物と人間の「本質区別」がたんなる知性の差という「程度の区別」へと帰着させられているから, 人間の特殊地位にかんする洞察についての危険を意味すると述べて, 『有機的なものの諸段階と人間』におけるケーラー評価を変更して, この点では後退しているように見えるのは, われわれにとってやや奇異に思われる。Vgl., Plessner, Mensch und Tier, Plessner Gesammelte Schriften VIII, Suhrkamp, S. 55ff.
- (60) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 342
- (61) Ibid., S. 342
- (62) Ibid., S. 341
- (63) Ibid., S. 341
- (64) Ibid., S. 342
- (65) Ibid., S. 347~348
- (66) Ibid., S. 343
- (67) 「理念看取 Ideation」とは, とりわけフッサールが本質直観, すなわち物事の本質を観取する働き Wesenserschauung とほぼ同じ意味内容で用いた概念である。例えばフッサールの次の叙述を参照されたい。「さしあたりまず『本質』ということによって表示されていたものは, ある個物の自己固有の存在のうちにその個物の何であるかとして見いだされるものであった。ところで, このように何かと問うて見いだされてくる内実はどうなものであれみな, 『その姿を理念的に観て取るありさまのなかに置き入れ』られることができる。経験的もしくは個別的直観は, 本質直観(理念看取)へと転化させられることができるのである。」(Husserl, Ideen einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, Erstes Buch, Martinus Nijhof, S. 10)
- (68) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 344
- (69) Ibid., S. 347
- (70) Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, ibid., S. 52
- (71) Ibid., S. 55
- (72) Hans Driesch, Philosophie des Organischen, Zweite Auflage, Verlag von W. Engelmann, 1921, S. 332
- (73) Ibid., S. 337
- (74) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 351
- (75) Ibid., S. 351~352
- (76) Ibid., S. 354
- (77) Ibid., S. 353
- (78) Ibid., S. 358
- (79) Ibid., S. 350
- (80) Ibid., S. 357
- (81) Vgl., Driesch, Philosophie des Organischen, ibid., S. 39~40
- (82) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, ibid., S. 306

- (83) Ibid., S. 305  
 (84) Ibid., S. 350  
 (85) 野外での最近の霊長類学の研究成果としては、周知のように、ダイアン・フォッシー『霧のなかのゴリラ』(早川書房)、ジェーン・グドール『野生チンパンジーの世界』(ミネルヴァ書房)に代表される研究は世界的な業績であるし、日本人研究者によるピグミーチンパンジーの総合的な研究として加納隆至、黒田未寿らの業績、ハヌマン・ランゲーンを研究して子殺しを発見した杉山幸丸、松沢哲郎『野生チンパンジーの石器使用』(『発達』第46号)、立花隆編『サル学の現在』(平凡社)などの業績は霊長類学の現在の到達段階を概観するのに好適である。また、アメリカ合衆国ジョージア州立大学言語研究センターのD.M.ランボーおよびE.S.サベージランボーが15年以上にわたって行っている、ピグミーチンパンジー“カンディー”ほかの、絵文字を初めとするさまざまな学習・知能実験にかんする沢山の報告(『人と話すサル「カンジ」』講談社などを参照)、日本ではチンパンジーに言葉を教える、京都大学霊長類研究所の「アイ・プロジェクト」の研究成果をまとめた認知科学的な研究として、松沢哲郎『チンパンジーから見た世界』(東大出版会)、同『チンパンジーの心』(岩波現代文庫)、山極寿郎『父性の復権』(東大出版会)など、必読文献に事欠かないというのが現状である。  
 (86) Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, ibid., S. 25

## Positionalitätstheorie in philosophischer Anthropologie Plessners (4)

OKUYA, Koichi

## Abstract

Plessner's theory on the position form of plants was examined in my previous paper. The present paper examines his theory on the position form of animals. Plessner asserts that while plants yield to the surrounding conditions, taking an open position, animals behave independently of the surroundings, taking a closed position. The closed position has resulted in animals having histologically differentiated organs and a central nervous system that coordinates these organs, and such position also requires an autonomous existence. At this stage, the organic system of the animal stands face to face with its surroundings on the basis of frontality and by forming a behavioral scheme of perception and reaction. In terms of space and time, however, animals are confined to the here and now, and cannot pull themselves away from such a position and point in time. It is impossible for animals to objectify space, time and things, which Plessner elucidates the limitations of achievement by animals. His predication is based on the academic achievements of the day, reflecting his background in biology. However his viewpoint is eventually resolved into the positionality or the position form. Thus, it must be noted that his overall theory could not surmount the common framework of philosophical anthropology initiated by Scheler, whereby animal and man are quantitatively differentiated. According to Plessner, animals have various limits to their accomplishments because they are bound by time, space and other constraints, and so their positionality is differentiated from man's decentralized positionality, that transcends these limitations. In contrast, there can be no reason to deny the idea that man and animal are differentiated not by their fundamental positionality but rather by constraints on the conscious activities of animal life and the great progress in man's conscious activities enhanced by rapid encephalization.

Keywords: Geschlossene Positionsform, Zentralität, Dezentralisierung, Frontalität, historische Reaktionsbasis

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学・倫理学専攻)